

陽明文庫蔵『伊語聴説』解題と翻刻

小山 順子

*キーワード

伊語聴説・三条西実隆・伊勢物語・注釈・旧注

はじめに

中世和学の大家である三条西実隆（一四五五～一五三七）の『伊勢物語』講釈の聞書は、四種類が知られている。

最も有名なのが、大永二年（一五二二）五月の講釈の聞書『伊勢物語 惟清抄』（以下、『惟清抄』と略）である。大永二年当時、実隆六十八歳。充実した講釈をとどめたもので、他の実隆による伊勢物語講釈聞書が一つもしくは二本しか伝わらないのに比べ、『惟清抄』は天理大学附属天理図書館や内閣文庫・龍谷大学図書館などに数本が伝わり、最もよく読まれたものである。

ほかに、『追談称聴』と呼ばれる本がある。宮内庁書陵部本と京都大学国語学国文学研究室本の二本が知られている。この書はその名のおおりに、逍遙院すなわち実隆の講釈を、称名院すなわち実隆の息子である公条が書きとどめた聞書である。公条は実隆の講釈を数度にわたって聴聞しており、その折々の断片的なメモのような内容となっている。あと一

本、実隆講釈を留めたものとしては、青木賜鶴子氏¹によって『覚桜注』と名付けられている宮内庁書陵部本がある。これは天福本の行間に朱筆で実隆講釈を書き入れたものであるが、公条説なども混入しており、純粋な実隆講釈とは言えないことが指摘されている。

上記の聞書は大永年間以降、つまり実隆六十代から晩年にかけての講釈の聞書である。最も古い実隆講釈聞書であるのが、永正六年（一五〇九）、実隆五十三歳の時の講釈の聞書『伊語聴説』である。後述するように、実隆が初めて『伊勢物語』講釈を行ったのは永正四年（一五〇七）十二月。それより二年後の『伊語聴説』は、最も初期の実隆講釈聞書と言えるのである。

陽明文庫には、『伊語聴説』一冊が残されている。なお『伊語聴説』は、この陽明文庫蔵本のみしか所蔵が知られない。実隆の、すなわち三条西家の初期の『伊勢物語』注釈の聞書として『伊語聴説』は注目されるものであるが、具体的な内容の検討については大津有一氏『増訂版 伊勢物語古註釈の研究』と青木賜鶴子氏「三条西実隆における伊勢物語古注

—「伊語聽說」「称談集解」に触れつつ—」（『百舌鳥国文』6、昭61・10）しか管見に入らない。

『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』（全十五卷、平1〜14、八木書店）
『伊勢物語古注釈書コレクション』（全六卷、平11〜23、和泉書院）・『伊勢物語古注釈大成』（既刊五卷、平16〜、笠間書院）など、『伊勢物語』古注・旧注の影印や翻刻の刊行が続いているとはいえ、『伊語聽說』の影印・翻刻の類はまだ出されていない。国文学研究資料館蔵マイクロ資料（55—2—6、E1854）によって、写真を閲覧調査することはできるが、書簡の紙背を料紙としているため、判読しにくい箇所も少なくない。そこで本稿では、解題とともに翻刻を収め、以後の研究に資するものとしたい。

一、書誌

まず、書誌について述べる。紙縫による袋綴の仮綴本一冊で、これは原装のままのようである。縦25・1cm、横21・7cm、表紙は本文共紙、表紙左肩に外題「伊語聽說」を打付書する。内題は無い。本文料紙は楮紙で、書簡の反古紙を用いている。墨付四十二丁、遊紙は、冒頭にはなく、末尾にのみ三枚。なお、本文の筆跡は近衛尚通の筆跡であると、陽明文庫長の名和修先生からご教示をいただいた。
本書末尾には奥書がある。便宜上、本奥書をA奥書、書写奥書をB奥書として掲出する。

（A奥書）

伊勢物語全篇講尺聴聞之次染筆、漏泄不可
勝計、呵々。追而可清書者也。

永正二年十月六日

平朝臣孝盛

みるめなき我身を―或説、小町卑下の歌也。みるめなきは、我に
みところなしと云々。それをしらて、あしたゆきまてくるといへる
心也。うらは、たゝみるめといふに、縁の詞ならし。」（42才）

（B奥書）

右這聴書者前、内府^{実隆公}講尺、

杉原伊賀守平朝臣孝盛所注置也。

^{説々只}
。応随所好乎。

永正十七年六月十二日書写訖」（42ウ）

A奥書の後に付されるのは、二十五段に関する注説であるが、これは
注釈本文と重ならない内容であるため、補遺として付したものと推測さ
れる。B奥書は、尚通の書写奥書である。但し、尚通の日記である『後
法成寺関白記』の永正十七年（一五二〇）六月十二日条に、当該の書写
に関する記述は見られない。

A奥書によると、『伊語聽說』をまとめた杉原（平）孝盛が聴聞の際に

取った講義録であり、洩れた部分もあったために、清書したものであったという。被注語のみが記されて、本来ならば説明があるべき箇所が空白で残されていたり、物語和歌や、説明のために引用される詩歌のほとんどが、初句のみ引いて「―」で略している点などは、聞書であるがゆえの体裁であると思われる。しかも同一の詞に対して何度も説明が繰り返されたり、未整理な部分が残されている。

また、本書には補入や墨減が多数見られる。料紙に書簡の紙背を用いていることを顧みても、尚通の書写の姿勢は、丁寧な書物を作成するというよりも、講義録をざっと写すというものであったと思われる。なお、本書は『伊勢物語』全章段にわたる注釈であり、章段も順番に並んでいるが、一箇所、章段の順序が乱れている。8丁表で九段が終わった後、十九段の注説があり、その次に十段に移る。一方、11丁裏に十八段があり、二十段が続く。九段から十九段、十八段から二十段が続く箇所は、丁寧に掛かっておらず、親本の段階の乱れであったと考えられる。A奥書に補遺的・断片的な注文が記されており、表紙裏にも貼紙が付されていることから推し量るに、十九段も親本では貼紙もしくは別紙を添えた形で記されていた可能性を考えうる。数多い補入も、尚通の書写姿勢だけに起因するのではなく、親本にも様々な形で情報が付加されていたためかもしれない。孝盛によるA奥書に「追って清書すべき者なり」とあるように、講義録の未整理な性格を濃厚にとどめたものであったと考えられるのである。

なお、実隆の『伊勢物語』注釈書で、全章段にわたるものは、『伊勢聴

説』と『惟清抄』の二種である。比較すると、『惟清抄』の方が遙かに整えられた内容を持つ。『惟清抄』をまとめたのは明経道の学者であった清原宣賢であった。一方、『伊勢聴説』をまとめた杉原孝盛は、和歌や連歌の作者であったとはいえず、一介の武士である。講義の聞書をまとめる手腕の差があったことは想定せねばならない。しかも『惟清抄』には、整えて清書し、実隆が一見を加えた上に、公条の加証奥書を得た天理大学附属天理図書館本が残されている。内容の整理・未整理の差が、実隆自身の講義そのものだけではなく、講義を受けて聞書を作成した人物の手腕や姿勢に起因する可能性に留意した上で、二書の注説を比較してゆることが、今後必要となる。『伊勢聴説』と『惟清抄』の、注説の内容や姿勢における違いについては、稿を改めて検討する。

二、成立

本奥書および書写奥書によると、永正二年（一五〇五）の講義を杉原孝盛が書き留めたものとなるが、「永正二年」という年次には不審があることを、大津有一²²氏が指摘している。実隆は生涯に十度を超える伊勢物語講義を行ったことが知られるが、初めて講義を行ったのは永正四年であることが、次に挙げる『実隆公記』永正四年十二月二十日条から判明するからである。

廿日「己丑」……向二亜相許一、今日伊勢物語説二終之、有二晚餐一、

杯酌、有二象戲一、抑亜相在国之事、武家御暇已出「云々」、此伊勢

物語事為「餞送」所望也、予又初而講釈、五ヶ度無為無事終レ功、自愛此事也。

在国のため下向する三条実望が所望し、彼への餞別として、実隆は伊勢物語講釈を行った。傍線を付したように、ここに「予初めて講尺す」とある以上、『伊語聴説』がそれを遡る永正二年の講釈の聞書とは考えられないのである。それゆえ大津有一氏は、奥書の「永正二年」というのは永正四年の誤かと思われる」と指摘した。さらに、青木賜鶴子氏は永正六年三月から四月の講釈に、本奥書を記した杉原孝盛が参加したことが実隆公記に見られることから（大津氏もこの記述に関して指摘はしている）、奥書の「永正二年」が「六年」の誤写であること、本書が永正六年三月から四月の講釈の聞書であると推定した。

永正六年三々四月の講釈に関する『実隆公記』の記事を挙げる。

（三月）廿六日「戌午」雨降、午後晴、……午後伊勢物語読ニ始之、相公羽林発起也、冷泉三位所望之間、招レ之令レ聴者也。宗碩来、甘露寺来臨、大徳寺之儀聊予有「問答」事、冷泉宰相、弥三郎光康事有ニ執申「旨、愚存分示」之了。……

（三月）廿七日「己未」晴、……午後伊勢物語読レ之、杉原伊賀守来レ會。

（四月）二日「癸亥」晴、夕陽如「薄蝕」、……今日伊勢物語読レ之、冷泉三位、師象朝臣、杉原伊賀守等来、……

（四月）八日「己巳」晴、……午後講「伊勢物語」、杉原以下如「例」、資直来レ會、各勸「一盞」。……

（四月）十一日「壬申」晴、……午時講「伊勢物語」、冷泉三位来、杉原伊賀守、師象朝臣、資直、丸七郎兵衛、大隅等来、今日終「其功」
「五ヶ度」、相公羽林発起之処、無為成就尤自愛々々、今度五ヶ度講了。……

（四月）廿日「辛巳」晴、伊勢物語初為「杉原所望」読レ之、左小弁以下人々来臨、勸「一盞」。……

（四月）廿一日「壬午」晴、……伊勢物語読レ之、杉原発起分今日終「功」。……

「杉原伊賀守」の名が見える部分に傍線を付した。『実隆公記』によると、この時の講釈は相公羽林、すなわち当時参議であり右近中将であった息子・公条（二十三歳）の発起によつて行われたものであった。三月二十六日の講釈初日には杉原孝盛の名は見えず、その翌日、二十七日から講釈に参加している。この度の講釈は五度にわたり、四月十一日で終了している。ところが、四月二十日から杉原孝盛の所望による講釈が始まり、翌日には終了している。初日に参加せず、二日目から講釈の席に加わった孝盛が、初日に聞き逃した内容を補うために、実隆に追加の講釈を依頼したと考えられる（「伊勢物語初」とは、初日に講釈した最初の部分のことを指すと解せる）。そして完備した講釈の内容をまとめ上げたのが、本奥書に見える十月六日であったと、青木氏は推定している。青木氏の推定は首肯できるものであり、そのように考えておく。

三、筆記者・書写者

杉原孝盛は、室町幕府の奉公衆で、伊賀守であった。連歌師として著名な杉原宗伊（賢盛、一四一八〜一四五八）に連なる者である。但し、宗伊との関係ははっきりしない。『尊卑分脈』には、満盛―賢盛（宗伊）―長恒―孝盛、と系図が示されているが、実は宗伊は満盛の養子で、長恒は宗伊の息子ではなく弟である。宗伊・長恒の二人が、兄弟の連歌師・歌人として世に名を知られていたことは、「杉原兄弟『賢盛・長恒』始末間令張行連歌、彼兩人当時之連歌師也」（『後法興院記』文明12・2・20）の記事からも窺われる（『兼頭卿記』文明9・8・24に見える「杉原兄弟詠草」も宗伊と長恒のことを指すものと推測される）。二人はともに歌会・連歌会に参加することも多かった。長恒は応永三十一年（一四二四）生まれで、宗伊より六歳年少であったが、文明十三年（一四八二）に五十八歳で、宗伊より先に亡くなる。

宗伊は前妻・後妻に先立たれるなど家庭に恵まなかったらしく、⁵ 子がいとも伝わらない。父の長恒は安芸守であるのに、孝盛が宗伊と同じく伊賀守を称しているのは、孝盛が宗伊の養子ないしは後継者となったのであろうか。

宗伊は、足利義政の近習五番衆の一人であり、能阿弥の跡を継いで北野連歌会所奉行となった連歌師であった。宗祇が選んだ竹林抄七人の一人であり、宗祇と『湯山両吟』を残している。『新撰菟玖波集』にも四十六句が入集している。また、足利義尚が打聞『撰藻鈔』を企画した際、

武家としてはただ一人、撰衆となった歌人でもあった。一方、孝盛の父・長恒も『新撰菟玖波集』に二句が入集しており、公家・幕府の歌会に参加している。二人は実隆と親しく、実隆邸にも出入りしていた。宗伊・長恒兄弟との親交が、子である孝盛にも受け継がれたものと考えられる。孝盛も実隆邸での着到和歌・歌会・連歌会に参加している他、実隆の依頼によって『統後拾遺集』の書写と『玉葉集』の校合も行っている。生年未詳、享祿三年（一五三〇）五月二十三日に没した。なお実隆は、翌享祿四年五月二十三日、孝盛の一周忌に序品の経文歌を詠み送っている（『再昌草』解題⁸⁷⁰詞書、歌番号は新編私家集大成による）。

なお、宗伊・長恒兄弟が近衛家に入入りし、連歌会に出座していたことは、先掲の近衛政家『後法興院記』の記述にも見られた。孝盛も近衛家に入入りしており、永正七年（一五一〇）九月十六日から十一月十二日まで近衛邸で行われた肖柏による『源氏物語』講釈を聴聞していることが、尚通の『後法成寺関白記』に見られる。鶴崎裕雄氏は、尚通が武士・連歌師などにも自邸での講釈を受けさせており、父・政家より身分・人数ともに多くの対象を迎え入れていること、そしてその顔ぶれが近衛家を中心とする文化・文芸サロンのメンバーと重なっていることを指摘している。⁶

実隆の講義を聴けなかった尚通が、孝盛から『伊語聴説』を借りて書写した本書は、尚通の古典学習への意欲と、近衛家での文化・文芸サロンに孝盛も加わっていたことを示すものと考えられるのである。

〔注〕

- (1) 青木賜鶴子「三条西実隆の伊勢物語講釈——『覚桜注』をめぐる——」
『女子大文学（国文篇）』55、平16・3）
- (2) 大津有一「増訂版 伊勢物語古註釈の研究」（昭61、八木書店）補遺篇一七
「伊語聴説について」
- (3) 青木賜鶴子「三条西実隆における伊勢物語古注——「伊語聴説」「称談集
解」に触れつつ——」『百舌鳥国文』6、昭61・10）
- (4) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期（改訂新版）』（初版昭36・改訂新
版昭59・風間書房）288—289頁
- (5) 伊地知鐵男『宗祇』（昭18・青梧堂）
- (6) 鶴崎裕雄「中世後期、古典研究の一側面——近衛尚通の場合——」『国際
日本文学研究集會會議録』6、昭58・3）

本文引用に際し、返り点・句読点はわたくしに付した。歌番号は新編私家集大成に準じた。本文引用は以下に依る。『実隆公記』：『実隆公記』（続群書類従刊行会太平洋社）、『後法興院記』：陽明叢書記録文書篇（思文閣出版）、『兼顕卿記』：国立歴史民俗博物館記録類全文データベース

四、翻刻

（凡例）

・漢字は原則として通行の字体で表記した。

- ・各章段の冒頭に【】内で章段番号を示した。
- ・丁移りは「（1ウ）」のように示した。
- ・本文・和歌等の引用には「」を付して示した。
- ・物語本文を引用する箇所直前に二文字、直後に一文字分の空白を入れた。

・句読点をわたくしに付した。

・補入箇所は「○」の横に、補入される文字を傍記した。但し、補入が長文である場合は、「○」の後に「（補入文）……」と示した。

・本文中に、清音・濁音で読むことを示す単点・双点が付されている場合、単点は文字の右肩に「。」を付し、双点が付されている場合は、その文字に濁点を振った。

・見せ消ちは〈〉を付して示した。

・墨減され判読できない文字は■、虫損で判読できない文字は□、摺り消された文字がある箇所は□と示した。（墨減）

・その他、注記は（）内に示した。

（本文）

伊語聴説（表紙）

一、心にもー かやうにいふ心えかたし。もとは異于他 蜜（ハチミツ）通の事。二
条后にあれども、伊勢そこを心得てかく書たる也。

一、今の男いくたりにも業ひとつにはむかはん物かとよむ也。かやうに

は思ともいまの——

一、白露は——よしきゆるともこなたよりは是非すましきといふ也。玉に——(表紙裏に貼紙)

此物語題号事、十巻抄又鳥風問答経信作と一条殿御説、雖然さもみえず。祇なども古注を專によまれし也。古注は物をたとへていふ。業平東国へ下事、東山に忠仁公かくしをきて後に出て、名所を勸いたす。愚見抄に古注之儀をあやまりとし給也。題号三の儀あり。伊勢物語を男女の物語といふ。伊は万象をはらみ、勢は万種をまく。伊は亡国の使、勢は国を守媒。畢竟男女の物語と云。伊勢や日向の物語同時に死事。段々みたれてしとはかまなきによりて此号あり。又日向物語といはぬそと云説、定家卿奥書にも、愚見にも此号難決と云々。業平みつから書よし、一説。或、芹川行幸の事は業平死後也。又此物語に狩の使の事専用。斎宮をおかしたる事、神に通罰をかうふらぬ事、狩使はしに書たる事(一才)彼筆作にあらすはと書之。とにかくに伊勢か作物語とおちつく也。大かた伊勢業平、ちと時代相違。但未又あふ。伊勢は七条后宮につかへ申。内々物語申たる事なとり合て、かく業平を発端にかきて、万葉の歌などおもしろきをとりにてかく。凡古物語にて、作意ふかし。心を閑に見すんは心得かたし。詠歌大概に書次第、古今は花実をかね、伊勢物語は花也。後撰は実はかり也。奥書上古人。詞花言葉をもちふへき耳ことかく、肝要也。業平は平城天皇孫阿保一五番目男一長天二年八月誕生——(一ウ)

【一段】

むかし男「むかし」ときりて「男」とみる也。むかし男といふ、みな業平也。うるかうふり古注には十六にて元服などの事をいふ。定家卿説不用。愚見には叙爵の事。宗祇は、いくつにてもあれ、元服の事なるへし。其ゆへは、此物語に、うるかうふり、人となるの初也。はてに、「つゝるに行」の辞世の歌をかく。始終をみせたり。十六にて奈良行たるとは見へからず。いつにても元服にて行たる也。しるよし古注には十六にて行程に、うるくしくて行たる程に、しるよししてと云。愚見、破之。たゝ業平の領知ありしと云也。かりに狩に行たる也。なまめいたるうつくしきと云心。幽玄と書。弱、文選。最媚、一条殿。宗祇、用之。はらから女の兄弟也。かいまみて垣間見、古注には、とつく事と書之。日本紀「あまなつち」、垣間見の事。たゝ物のあひよりほのかに見たる也。これ優也。おもほえず故郷にかゝる人のあらんとはおもほえず也。はしたなくへて(両説、此女十分に足たると云心、半になき也。強、故郷にかゝる女のゐた(二才)るか似あはぬと心得たるよし。かりきぬの、みちの国よりはしまりたるしのふすり也。つよく乱たる物也。女に歌をつかはすへき便なし。此しのふすりのかりきぬをきて、歌をかきてやる也。かすか野所の名也。わかむらさき紫の根すりの衣と可心得。おいつきて古注、帯つきてと云説。かりきぬのすそのくゝりをつきて、帯のことくしてやる。契約に必帯をやる也。おいつきてやる、用之。女の栖を尋てやると心得へし。ついで此返歌、おもしろかるへきと

てやる。此歌は融公の歌也。心を用かへたる也。融公の歌の時は、君ゆへにこそみられたれ也。返歌に其ごとくしてはあはず。上句は序分にて、我ゆへにはよもあらし、誰ゆへにかみたれさせ給うと用かへたる也。

心はへ 此返歌を心をかへたと云説。ついで此本歌とり様の事。

みやび 嫁也。

【二段】

むかし男 業平。 ならの京ははなれ 遷都の事。先西京をたてはしむるによりて、さて「女ありけり」と(2ウ)かく。「世人」のもしを入てよむ。源氏物語同之。帝王諱の事。 ひとりのみも 男のある也。

まめ男 古注、貞観政要に書事、^(マ)蜜 男と書。ま男と云心也。実男、用之。思の真実の男と云心、実人は物思ひも又真実なる心也。 おき

もせずー そと一夜馴て別の心のふかきを、詞よりかけてみるにおもしろし。その人にそひたる夜は、おきたるともねたるとも、夢のやうなる心也。 なかめ 長雨也。詠の心もこもるへし。心あまりて詞たらずの歌体也。○ー〔補入文〕いかゝ思けん、業平の心くみかたし。さて如此かく。 そをふる 添降と書。たゝさひしくふりたる体なるへし。】

【三段】

むかしおとこ けさうし 二条后也。長良卿女。忠仁公のめい也。

おもひあらは むくらのやとに物をひつしきてぬるとも、思人あらはよかるへし、一説。祇説、「おもひあらは」と五文字にてきる也。思ひあらは玉の台も何かせん、思ひなくてむくらの宿にてもねん也。万「玉しける家も何せん八重葎しけるこやも妹としねなは」、或人後勘云々。」

(3才)「ひしきも」をおり入てよむ。「なにせんにー」、万歌にてよむ也。 たゝ人 女御にたゝせ給はぬ前也と、伊勢かたすけてかく歟也。

【四段】

むかし 西東の京あるいまの京也。 おほきさい 染殿後の事也。清

和天皇の母后^を申也。 本いにはあらて 本意にあらて、一説。又、

顕字あらはなる心に用。しやうをよみかふ。 外にかくれにけり 清

和へ參給と云。又兄弟のうちにかくすと云事。 なを 此字にて一年

の久事をこめて書也。「つゝ」と云字も同歟。心のこもる也。 梅の花

のさかり 「春風桃李」。世間の梅の花とみる也。そことさしてみるは

不優。「秋菝の花」、此歌も世間の萩をみて、高砂の鹿を思ふ也。 あ

はらなる 二条^の院^后ゐ給はぬによりて、其所の体也。 月やあら

ぬー 月はし其月ならぬか也。春もおなし心。わか身はへちの物ともお

ほえず、もとの身也。」(3ウ)これも其心あまりての歌也。后のゐ給は

ぬゆへ、月も春も一向おなし物とも思はぬ也。祇説。月や其月ならぬか

と思へは、よくくみれはもとの物也。春も同事。 ひとつは 「は」

の文字「も」文字とみる也。それ「も」も心にてもたせねは不幽玄也。

名歌也。

【五段】

むかしおとこ 東京西京也。東京の五条の事。 みそかなる かくし

所也。しのひて業平の行所也。 つゐち 古今は「垣のくつれ」とか

けり。猶優なる歟。 人しれぬー つよく歎心あり。そこにこむる也。

心やみ 心をいた^{まし}むる心也。病也。業平を染殿后不便に思召心あ

るを云也。あるしゆるし 業平にあなち二条后を染殿后ゆるしたるにてはなし。此歌ゆへ、聊寛宥の心あるをよめり。二条后にこれより歌の注也。せうと 二条后兄弟成へし。長良卿御子兩人の事成へし。

【六段】

むかし男一 えうまし 我物に成かたき也。 からうして やうくへにへて也。辛苦して也。此段、古注の心あり。(4才) あくた川 名所にあらず。禁中にみそをほりてあくたをなかずを云也。此外は不及歟。 草のうへに 女の事也と一説。 露を 思ひの事也。

かれはなにそ 后にたつへき程の人の、業平にぬすまれてゆくを、あさましく思心也。文集に「女の風になひくく露」、左伝「遠契」、いづれも同、古注也。 鬼ある所 弓やなくひ 心のたけき事を云。しんせい伝「姿は」。内裏にちやうの間鬼間あり。先帝の御雑具ををく也。人かよふ事まれ也。其処に口一あり。后をとりかくす事也。 神なる 帝王の此事によりて、おとろくしきいかりの御座ありしを云也。当流不用。 かれはなにそと 后のみもならひ給はぬ也。心も道もいと物さひしく、我心ならぬやうなるを云也。禁中とをかるましけれども、人をぬすみて行程に、千里を行やうなる也。鬼は、おそろしきと云心なる也。 くら 古注、「(4ウ) 鬼間、清涼殿のおく也。業平、あくた川をへておくへ行かたし。相違。 あはらなる 大内の事なれば、あれたるもあるへし。 座 くらとよむ。高御座。 弓やなくひ 人の心のあらくしき、当流同。愚見抄、業平、其時近衛つかさの事。 や

うく夜もあけ はやくあけよかしと思心也。 鬼一口 せうとたちのなさけなくとりかへし給事。 あなや 後のわひたる詞。悲。 あしすり 一段切なる心也。 しら玉か 業平歌。露をとひたるを、こゝにて「しら玉か」とうけたる、幽玄也。 これは 物語注也。いまた后にもたつて、染殿后のかたにつかへ、人のやうにてる給也。ほり川 照宣公の事也。 くにつね 長良卿の跡をつき給也。兄なから位卑。 下らう いまた殿上人にての時の人。

【七段】

むかし男一 好色ゆへあつまになかされたる事也。古注相違。 いせおはり 古注、伊勢、男女の事也。おはり、かゝる男女の恋路のおはりと云心也云々。 あ(5才) はひ 交也と云心と云々。 うみつら 憂面とかく。 なみ 涙也。 しろく 顯也。 なみ 文選「小濤流波」、涙事也。 しろく 白は顯也。文集にあり。 あはひ 交。 文選によむ。当流、さしむきてみる也。 伊勢おはりのあはひ つよくあらく浪のたつ所也。「しろき」と云字を入たるは、業平の心也。平城の孫たる人の流され行道すから、浪つよくたつをみもならはて、かなしく思心也。しろきと書たる、肝要也。 いとしく 五文字にてせめたる歌也。さなきにたにもと云心也。よせてかへり、く浪か思をすむる也。いつか帰らんと云もこもる也。

【八段】

むかしおとこ 前の段とおなし。 友とする 古注、平定文・紀有常。業平知音の事など。当流、誰とも不定。 しなのなる 古注、無

品也。流され行程に解官を云也。 あさま 苦をいふ。たけは、思の至上也と云々。文集を引。(5ウ)当流、さしむきてみる也。 しなのなる一 遠近眺望の歌也。旅たつ時は、うきもつらきも相交也。此煙にて旅のうさをなくさむと云心也。旅人まで見とかめぬへこ^かと、我心のなくさむによりてよみたる。たけある歌也。

【九段】

むかし男一 ようなき 此時、近衛にて解官の事也。 みちしれる

后をおかして流るゝ、同道してなかさるゝ物もいさめぬは、道しらぬ也。 みかは 三川と云心。三人の心、二后・染后・四条后、三人の

事。水は人の心水の事をいふ。恋にほたされて行を云也。くには、苦心也。 八はし 三人に五人を加へて、八人と云。はしは、思ひわた

る心也。 そのさは 古注は、あつまへはくたらぬ。忠仁公の東山御所へかくし置給たる事三ヶ年の間に此物語をかくと云事。関白の恩沢を

云。御庭の体をかくと云説。 木のかけ これも関白の事を申。当流、さしむきてみる。 ようなき 無用也。みやつかへもせず、左遷の事

を云也。(6オ)そこを八はしより注也。 八はし 縦横なる水の体也。くもては、かなたこなたへかけたる心也。 かれいゝ やつれた

る為体也。 ある人の 同道の人なるへし。 から衣一 思と云字、肝要也。旅たちて左遷の儀も思人ゆへ也と云也。故郷の事、後の事などを、此「思」と云字にこめたる也。 涙おとし つよく人の感たる心

也。 ゆきくゝて 三川より駿河へ行、遠江を「ゆきくゝ」の字にこ

めて書也。古注。 うつの山 空の字也。むなしく恋の山に入たる心。

するかはたかつねの当官、駿河也。その人の所にてかく程に、如此。山はやまひ、恋の病と云也。 わかいらん 東山にゐて、恋路のやみに

まよふを云。 つたかへて 我はおしこめられてみれば、皆人のさかへたるを云。かつらを臣下にたとへたる事、文集にあり。 かへて 王

のさかへたる事。 修行者 僧正遍昭の東山をとふらはれたるを云。深草御門につかへたる人也。道心おこして名人也。 するかなる一 当

流、さしむきてみる也。古注、あは(6ウ)ぬ事也。 つたかへてはしけり 葉しけり。〇とよむよりは、たゝ「は」とよむ、猶優にてまさ

る也。両説。 すゝろ 辛字也。からきめをみる也。 修行者 しらぬ人也。修行者は業平を見しる也。いひかけられてみれば、みし人と書之、面白。 その人 我思人の事也。 つく 事付たる也。

するかなる一 「うつの山うつゝ」とうけんため也。所の名は勿論なれども、かやうにみる也。うつゝこそあらめ、夢にたにあはぬと云に、

恋しかなしと云心を、ふかくこめたる也。はるくゝときたれば、うつゝにもあはぬと思ふ。まして夢にもあはぬやうに、みし人を思心也。詞た

らぬ心也。 ふしの山 清和を申三十七にて御出家あり。おもひよらぬ御すかたと申。文集に、王を山にたとふ。六帖「みねたかきふしの一」、

江口白女歌也。嵯峨天皇にまいりて。〇^後よむ歌也。これも王を富士にたとへ申。 時しらぬ一 清和御出家心得申さぬと云心。 ひとつとて

か 我御年をいつと思召そ也。かのこまたらは、臣下出家し、又出家せぬ相交たる心。 はたちはかり 位二十重にあたる心、不用。当流、

さしむきてみる也。業平、旅(7オ)行の眺望也。ふしをみれば、思ひ

もよらぬ雪のさた／＼とふりたるをよむ也。所詮、時しらぬ山は富士なりけり。此山はいつと思ひたるそとよむ也。心・意・識、三の心、此歌にあり。こゝにたとへふしをみていひたるなれば、相違。後に伊勢か書程に富士の詞也。はたちやうもなし。しほしり壺塩

の事、一説。こまかにはみそと云。猶ゆき／＼て駿河までをかきて、いつ・さかみをこめて書程に、二ヶ国こもるゆへ、「猶」と云字をくはへたり。むさし長良卿、其時むさしの守、其子とをつね、下総也。すいた川と云川、法性寺にあり。五音かよふゆへに、すみた川と云。

わたしもりー 当、関白の御詞也。先帝清和はや出家し給、陽成にめしいたされよといふ心。長良卿すいた川をせき入て、陽成を申。其時、流人めしいたされよと云事也。わたしもり 臣下・関白、君をまもる事を、しんせい伝にいひたる事。日もくれ 位をさり給事。日を君にたとへ申事、文集にあり。物わひしくて 天帝御免もなくて、はや罷出事を左(7ウ)遷の人たち思心也。しろき鳥 陽成、曲水

宴の時、御装束の色しろき也。はしあし ちちひる、ひのはかまを申。 鴨 司宜と書之。漢高祖顔大也。陽成又如此。それにたとへ申。水のうへ 関白のけいゑい也。見しらす 流人位につき給を見しりまいらせぬ也。当流不用、さしむきてみる。 大なる川 すみた川、もとより大なれとも、又心あり。都をはなれて行人の、すこし行たにもかなしきに、はる／＼行て、けつく大なる川をこえて行は、猶かなしき心を云也。はや舟にのれ 都をおもひてやすらふを、船頭の催

促したる心、面白。 京におもふ人 面白詞也。松月など殊面白かる

也。なきにしもあらずと云心、一段すぐれたる也。とひければ業平のとふ也。都を切に思心猶こもる也。名にしおはゝー「南江路人亦泣秋風暮」、これよく相似たり。

【一九段】

むかし男ー 女 紀有常か女也。業平、宮つかへするかたの女也。染殿后など歟。ごたち つかはれ人の(8才)惣名也。あひしり 契をかはしたる心也。男ある物かとも 男のかたよりかたたるを恨也。あま雲 天雲也。とをきと云心也。さて「よそにも」とつ

けたる也。雲をもて人にたとへてよむ也。あま雲、雨と云心をもたせたといへとも、たゝ天雲也。ふることは 経字也。有常か女、心さたまらてふた心あるをよむ也。わかるる 我居へき也。風のはやき山には、雲も居所をさためぬ也。

【二〇段】

むかし男ー 東国へ行巡道の事也。女は、誰ともなし。古注は、紀有常、当官武蔵也。あてなる 人をほむる也。勝字。業平。なを人しゆしやう、ただからぬ人也。位は諸大夫程の人歟。直人。古注、鹿人。文集ニアリ。藤原四姓のうちにて、ことに貴と云々。古注、義廉ト云々。父はさしたる人ならねは斟酌。よみて よんてと読。すむ所なん はや注を書たるは、此歌心えかたきゆへ也。みよしのゝー 古注、田面祭。かやをもて人形をつくりて祭。雁をもかやにて作て、むこの儀を相する也。当流、さしむきてみる。ひたふる 永一向に君か

方へよると云々。寄恋の心。よる 寄、夜字をもたせたる也。む

こかね かねは器量。」(8ウ) わか方に― これも雁にて我思ひを

いはせたり。「いつかわすれん」は、母の心さしをいつの世にわすれんそ

と憫歌也。となん 歌の事也。人の国にても 二条后ゆへ東国

へなかさされたれとも、流人にて猶未休と注詞也。

【一段】

むかし男― わするなよ― さしむき也。雲ゑと云縁にて空行月とは

よめり。歌から面白也。拾遺に入たり。たゞもとか歌也。不審の事也。

延喜の比人、業平以後人也。難分別。伊勢かおもしろき歌ゆへ作入たる

歟。又拾遺に作者誤て入たる歟也。

【二段】

むかし男― 古注、人のむすめ、二条后也。父の御官大和守也。むさし

野へ行、不審。春日野にむさし塚ありと云々。みさこ丸―、当流、此歌

にて一段つくり出たるとみる也。ぬす人ゆへ「からめられ」など書也。

みちくる人 満来也。むさしのは― 歌義なし。若草のつ

ま そともえ出たる端也。火をつけんといふによりて、「けふはなやきそ

と誦也。古今、春日野とあり。心か相違する也。

【一三段】

むかしむさし― いつれも武蔵にての事也。男(9才)も皆業平也。

むさしあふみ かけて思ふと云心也。むさしあふみ― 詞書の縁

にてかくよむ也。古注説、これは行平女也。業平 蜜(ハチ)通は勿論、されは

「きこえねははつかし」と云々。武蔵より燈は貢進する也。はしめて此

国よりしいたり。しなのゝま弓、これもはしめてしいたり也。

これは一条殿・へ宗 祇説同。古注は、いきよりあふみをもしつけたり。

はなれぬ中と云心と云々。とふもうるさしは、おちの事なれば也。たへ

へかたきは、かくよみたるゆへに猶思ひまざる也。とへはいふ― 下

句の心をうけて、なにとも進退まよふとよむ也。むさしあふみと下にお

きてよむ、優に成たる也。のひておもしろき也。

(六く七行空白)(9ウ)

【一四段】

むかし男― こゝも作物語也。文と綾との心也。古注之説、長良卿の事

申之。万歌をなをしてこゝにかく。一段こゝをは作物語とみる也。く

はこ かいこ也。蛭(ヤブ)蛇命みしかくて、しかも契ふかし。玉のをは

かり はかなくすこしの間と云心也。或説、念珠一くりの間と云。難用。

此かいこ程の命のうちなりとも、あひてしなはや也。夜もあけは―

きつは狐也。下略也。はめ 食也。くたかけ 家鶏也。くた

は細也。小鶏と、一条殿御説。せな 夫也。くりはらの― 業

平、女をなくさめてよむ歌也。此人あねはの松のやうにあらはと云心也。

「をくろさき―」、その歌と同也。三の小島、面白所也。人ならば 都

へさそひて行て人にみせはやと云心也。よろこほひ 此段、皆あつ

まの事に書成也。勝地無主勝今案断人則主になる也。あねはの松のやうに主

なくは也。

【一五段】

むかし― なてうこと さ程なきと云心。さやうにて (10才)

始終人のめなれば、我物になりてありかたき心也。　しのふ山　所名。

勿論、又「しのひて」といはん枕詞。人の心へ忍ひ入てみる道も哉と、我を思か思はぬ、しらんと云心。「おもふらん人の心のくま」古今歌に同事也。　めてたし　歌の心かと云。前の「さやうにては」と云詞にかけていふ歟。只業平の事也。　さかなき　悪字。又不詳。　せんは

「は」ゝ助詞也。業平にとりつめられてはいかゝ也。

【一六段】

むかしー名虎子紀有常　業平のしうと也。三代は、淳和・仁明・文徳。

惟高・清和事、名虎死後、有常はつかへたれとも、敵御方のやうにありし也。　あてはかな　妙字也。すぐれたる心。　あね　古注説。

当、誰ともなくみる也。　むつまじき　女の尼に成て行を恨の心也。

手を折てー　有常、業平方へよみてやる也。　十と四(マヤ)　四十年也。

うへには何事をもいはてあれとも、そこに色々の事かこもる、哀也。

まで　此字にてさま／＼の物を送たる心あり。　年たにもー　業平

返事也。」(10ウ)四十年の間いくたひ君をもたのみし事ありつらんと、

女の事をたすけてよむ。業平のせい也。　これやこのー　又有常歌。

五文字、衣をさして云。送物の衣、さなから天のは衣也と云。下旬に自

問自答して、「むへし」、ことほりなり。　みけし　上衣。御衣。業平

方へ人の送たる衣なれば也。　秋やくるー　前歌は衣の事、此歌は愁

の事をよむ。業の心さしを感じ也。　まかふ　露は草木にをくか、もし

をきまかへて我袖にをくかと云心也。よく／＼思へは感涙なりと云也。

【一七段】

としころー　人　古注説。　あたなりとー　此女のあた／＼しきと

云を、ちとらみたる心也。　今日こすはー　業平歌也。よき時分き

【一八段】

むかしー　なま心　中程の心とみる也。無子細也。古注はよきと云心、

好字也。長能詞。有ナ好心。其詞美也。此段、誰人となけれども、小野

小町とみる也。此詞のやうにて此人としられたる也。　男　業平。」(11

オ)　紅にー　業平第一好色の事をおとしてよむ也。　とを、た

はむ也。た、雪のふるかともみる也。白は本色也。好色は跡かたもなき

と云。小町隣にあるを、業平音信せぬを云也。或説、うつろふと云に、

やうありつへき也。男のかたより音信せて、女のかたよりいひやりたる、

本色にてなきと云心、今案。　しらすよみ　好色おとしたるとは、と

りあはへせ／＼てよむ心也。　くれなゐにー　紅白相交たる菊を給をよ

ろこふ也。おりける人の袖にてこそあれとよむ也。或説。　しらすよ

み　卑下也。　紅にー　紅を我事にする也。其上白菊の交たるか、小

町袖の事を云。好色をおとしてよむを、小町おもひかねて歌を給は、好

色第一をあらはすとよみたる也。

【二〇段】

むかし男ー　古注、有常女也。奈良にすむ時、八幡よりはつもみちを折

と云也。当流、誰ともなし。　宮つかへ　いまの京に上洛也。　か

えてのもみち　若葉の紅葉也。「ひとへ山いく重霞のへたつれと春の紅葉

の色そかくれぬ」、万歌也。文集「彩霞」。　君かためー　業平、君

かためにと折たれば、はや紅葉」(11ウ)したるにて、君の心のうつろふ^かと心もとなかる歌の心也。返事は 人のかたへ文をやりては、

返しをとくみたき也。道すからも、その事を思をこめて書也。いつ

のまに― 前の歌返し大事なるを、業平のうへを一段うちてよみたる也。

此紅葉を折てうつろふとよみたるを、又女は、たゞ今こそ別たるに、いつのまにはやうたかふ心のつきたるそとよむ也。「春なかるらし」にて、秋に成たる心あり。

【二一段】

むかし男― 女は小野小町なるへし。いとかしこく 契のふかき心

也。いてゝいなは―人はしらねは 業平にかきらぬ心也。 けし

う 心もとなぎ也。 おもふかひ― 業へ平へ歌也。上句は、ふかく

恨たる也。下句は、我こそふかく思つれとも、又うらむる事もこそあり

つらめと、身を省たる心也。これ又業性也。又上下ともに一向恨たる心

と、一説。 われや この「や」、やは也。 おり 居也。 人は

いさ― 又よむ也。 玉かつら 面影と云枕詞也。万歌おほし。」(12

オ)玉かつらを女の事を云と、一説也。かつらをかくる故也。人はおも

はてやあるらんと云心こもる也。 この女― 小町か定心ならぬか見

えたる也。 いまはとて― 我はわすれすしのふとよむ也。 わす

れ草― 人をわすれんとて忘草をほうふる物也。さやうにあらは、我わ

すれぬをはしり給ふへしとよむ也。 けに まさりて也。勝字也。

わするらん― 定心ならぬを、そひなから又疑也。 中空に― 返

歌十分にあひかたき也。雲をもて我思をいはする也。わかありさまを観

てよむ也。業に、定心ならぬをはちしめられて、身を歎歌の心也。 とはいひし^か 歌よりつゝけてみる也。よく身を^は観したれとも、又別たる也。

【二二段】

むかしはかなくて― これも誰ともなし。 うきなから― 前の小町

か段とおなし心也。 かつ かくと云心也。且にてはなし、まきるゝ

也。 あひみては― 又返しに、あひかたし。前の歌に業の同心した

るにて、返しはきこえたり。はたしてのけて」(12ウ)又心をおこし

てよみたる也。或説、川島は両方に水かなかれて、末はひとつになると

云。いかゝ也。嫌心は、「心ひとつをかはしま」と、島を一用にたてたる

程に、末はたゞ水のなかれたえぬとはかり、下句は心得へし。 其夜

いにけり いきけり也。前の歌は、その夜とたのめねと行たる程に「と

はいひけれと」也。 秋の夜の― 夜にとりても秋はなかき心也。

秋の夜の― これは業平歌よりは、心幽玄におもしろし。

【二三段】

むかし― 子ともあまたありとみえたる也。ひとりは業平。古注は有常

女。奈良の事といふ。当、誰ともなし。 つゝゐつの(左右に傍記で声

点あり。右「古つゝゐづの」、左「当つゝゐづの」古注、調五。業平年も

五、有常女ふたりの年を云と、不用。当、かさね詞也。つもし一過て、

つゝゐのいつゝと云事也。「つゝいつの」定家歌、これもかさね詞也。

「つゝいつのいつゝ」千五百番、衣笠―、皆かさね詞也。おさな心に、

いつゝのたけにならばなと契たる事を、業平のよみてやる也。 いも

いもせと云事也。いまた嫁せねとも、はや契をきたれば、同事也。く

らへこしー かたへん(13才)までさかりたるかみのすかた也。誰

かあくへき かみあげと云事也。余の人の契(出)あるましきと、女の返事

也。 ほんのことく 本意也。 おやなく 親無、一説。又、親の

なきかことく、わひ人になりたると云心。 かうち 業行也。身をも

たんとて行たるとみれば、非幽玄。女を憐愍へに(し)て、縁にもつけかし

なととて、かれたるとみればよし。 風ふけはー 此段、中にも面白

也。古今詞には「琴をひきて」とあり。猶おもしろし。大和物語「ひさ

けに水を入れて」と云も、又面白。貫之も、此歌は上品上生なりと云也。

しら浪 盗人と云、梁武帝事、古来説也。当、盗人をのけてみる也。し

ら浪は、「たつた山」とうけんとしてよむ也。畢竟、下句の心、「ひとりこ

ゆらん」簡要也。万「わたつ海のおきつ白浪たつ田山ー」、「(或)島のや

まどにはあらぬー」(証歌也)又、顕注(マ)蜜、勘説。 けこ 笥籠。 いひ

かひ 海草也。さかな也。周公旦、壤を堀故事。これもこまやかに成敗

したる也。前詞同前と云。不用。当流、まへにやさしき事をかきしておく

に、狂言を書也。作物語のゆへ也。 君かあた(13ウ)りー 万(○)歌

也。さしむきてみる、面白也。「いこま山いさむるみねにゐる雲のー」、

定家歌此心也。 からうして やうくして也。物のからきと云字也。

君こむとー 下句、あはれ也。 といひけれと こんといひけれと也。

【二四段】

むかし男ー 女は誰ともなし。男は業也。古注、有常女。三とせこぬは、

忠仁公のもと東山にこもりゐたる事を云。 いとねんころ 古注、嵯

峨天皇御子。不用。誰ともなし。 此男 業平也。古注、「このと」、

勅諫三年戸を閉と云。不用。 歌をなんよみて 業、勅諫二条后ゆへ

也。さる程にねたみてあけぬいふ説、不用。 あら玉の(年)ー 男か

れても三年まつか法也と云、なに、ありとはなし。 あつき弓ー 三

弓、三年にあたると云、或説也。弓ははる物也。三ツはるにて、三春を

もたせたる也。「年不來無春ー」、(文集)年を春と云例。 かこと ちかひ也。

当、三春不用。た、かさね詞也。「弓といへはしななき物をー」、神楽の

歌によみたり。此歌、三年の心なし。又「あつき弓ま弓つき弓つきもせ

すー」、(14才)定家歌。これも三年の心なし。た、心のひくと云事也。

つき弓年をへて つ、かねとも、かやうにみれば余情あり。 う

るはしみせよ 以前ちかひたるをわすれたるかどせめたる也。うるはし

く見せよ也。古今「ことならはおもはずとやはー」、これは、かくると云

事也。弓にひくと云も必ず心得かたしと云証拠也。 あつき弓ー 君

か心はおもはぬやらんもしらねと、我は思也。 しりにたちて 或説、

業の歌につきてしたふ、必しりにた、すと云。 し水 心水と云。

およひのちして 及後而と、古注也。当、た、さしむきてみる也。 お

よひのちして 道すから墨筆もなけれ(は)也。およひ、こゆひなるへし。

きえはてぬめる あなち死すへからず。思の切なる也。 いた

つらに これも思の休せぬ也。死するにはあらし。

【二五段】

むかし男ー 女 小町也。業平をちと恨心(ある)也。 秋の野にー 上

三句、いつれも露のおほき物をよせてよむ也。 あさの袖 朝の袖也。

上に露のおほき物」(14ウ)をいひて、それよりもあはてぬる夜はひちまさる(虫)口みれはおもしろし。古今は「あはてこし」と云。あはてぬる、

ひとりぬるなれば、こしも同事也。　みるめなきー　わか身をうら

恨也。業、定心なきを恨ともしらて、朝夕こゝにくると云事也。或説、

此歌前と返歌と心あはぬ也。前の歌「さゝわけしあまの袖」と云也。「さ」を誤也と云々。いつれに露のおほきは同前。

【二六段】

一五条わたり　二条后なるへし。業平(マヤ) 蜜通やみて、后に成給のちの事也。二条后あはれかり給を、かたしけなかる歌也。　おもほえずー

みなと　涙、両説。　みなとのさはく　涙のいかめしき事を云歌。

「我涙雨となりては沖津舟ー」、諸兄歌。「涙為池ー」、詩にもあり。

おもほえず　かゝる御憐愍あらんとおもほえず也。此御憐愍を承て、おもはずしらす涙の舟のよる程なかるゝと云心、両説。

【二七段】

一女のもと　二条后、古注。当、誰ともなし。　ぬきす　手洗に(虫)口にあ

らゝとすたれをあみてをく也。へりなともある也。うちやりてとは、のけたる也。　ぬきす　とはしりを」(15オ)かけしのため也。　わ

れはかりー　思の切なる心也。水の下に影のうつりたるをみて、わかたくひなる物もあるよと思也。　一たちきゝて　自然に行あはせてきゝ

たる也。　みなくちにー　かはつは水の下とよむ。前の歌よりうけてよむ也。其心は、我かくのことく思か、そなたにかよひてかやうにあるとよみかけたる也。かはつは一なげはことゝく鳴と云也。男かへる

鳴と云、一説。「人倫にあらされとも其道の靈をしるものー」、公任卿集序に書、おかへる也。

【二八段】

むかしー　色このみ　大概古注、小町。愚見にも如此。当、誰ともなし。　なとてかくー　あふこ　期也。其儀かたく成也。　水もら

さし　堅固に契と云心也。　あふこ　かこにてよみたてたる也。むすふも、かこをくむ心也。又畢竟跡もたまらずはかなき心也。

【二九段】

むかしー　東宮女御　二条后也。清和女御と書か、たゝ女御とかくへきを、東宮女御と書、不審也。陽成院やかて東宮にたち給、その母と云心也。むまれ給てあくる年、花の賀あり。后廿八歳也。東宮二歳也。古注不用も此儀など相違也。此賀、染殿后四十賀、二条后し給也。其奉行を業平うけ給也。花の」(15ウ)時分し給ほとに、花賀と申也。　花

にあかぬー　年々花に執着は勿論也。されとも今日のやうなる事にあひたるはなし也。殊二条后より奉行うけたまはりて一段今日くるゝをも惜也。歌のことから神妙也。上は賀の事をいひて、下に恋の心かある也。

鳥風問答説、「けふのこよひ」は、二条后、染殿后を賀給榮花の心也。されは花もちるましきと云也。

【三〇段】

むかし男ー　はつかなる　そとあひたる心也。　あふ事はー　玉のをは、ものゝすこしと云心也。つらき事はおほきと云。玉のをとよむによりて、下句「なかくみゆらん」とあり。

【三一一段】

むかしみやー 古注、染殿后とあり。当、た、禁中成へし。業平、此局のまへをわたる也。女、誰ともなし。古注は、伊勢とあり。 なにのあた 愁訴のある也。 草はよならん 業平を恨也。草はつゝみにかるゝ也。人のはてをみんの心也。愚見・宗祇、此分也。或説、ふるき歌の詞也。万葉歌也。「わすらるゝつらさはいかにー」。或説、これは業平のうへをはいはず、かなたこなた心をかよはせとも、又うつろひ行程に、其時かよふ（16才）女に對て云と云々。「草暗平原縁ー」、毛詩にあり。草を女と云証拠也。 つみもなき人ー うけへは 人をあしくいはゝ也。師説は、業平の我身にうけて人をのろゝしくいはゝ、そなたにおはんと云也。「観音経還着ー」心也。誓^{ウケテ}、愚見説、又呪^{ウケユ}、陰陽記詞也。○わすれ草と云事に女の事をいへは、よくあふ也。 ねたむ 又そはにてねたむ ○女もある也。

【三二一段】

むかしー 物いひける すこし契をかはしたる事也。 としころありて 中絶の心也。 いにしへのー くり返しむかしを 中絶したる程に、むかしになしたきと云心也。 いにしへは、例式の事也。 むかしは、ねかひ事也。されは、いにしへ・むかし、二あれとも不苦。 を た巻 愚見説、へそと云物也。「くり返し」といはんため、をた巻をとり出したる也。 といへりければー 伊勢批判の詞也。

【三三一段】

むかし男ー むはらの郡に 業平領知ある也。末に布引滝も此事なる

へし。此気色をみて、女のかなしかるをなくさめてよむ也。 あしへよりー 上句^方業^{マユ}にあり。其時よみあはせたる歟。又万歌よりつくりたる歟也。しほのみちくるも、あしへにては（16ウ）みえず。うへには見えすとも、下にはいやましなると云心也。 こもりえにー ふる江などの心也。草などにかくされたる也。船は「さほ」いはんため、棹は「さして」といはんため也。こもりたる下の心はしらすと、たのみへかたゝかたき心をよみたる也。 む中人ー 批判の詞也。無子細そと云心を、下にこめて書也。

【三四一段】

むかし男ー 業平になひかぬ人によみてやる也。 いへはえにー いはんとすれはいはれず、いはしとすれはむねにさはく、思の切なる心也。 上句を下句にて尺たる也。 おもなくて 無面と云心也。はちなくて也。 つれなきと云によりて、作者の筆の加^{クフ}やう也。

【三五一段】

むかしー 心にもあらぬは、思の外なる心也。 玉のをー 命の事をいへとも、これは「を」はかり也。玉は、ほめたる也。あはをは、あはせたるを也。かた糸は、たえてのくる也。あはをは、あはせたる程にかたゝたゆれとも、又かたゝたえぬもの也。 むすへれば 契の事也。思の外にわかれたれば、又あはんの心也。 あはを 或説、鳥風ー、あはゝしきと云心也。此注経信云々。あはゝしきをとほ、つよくよらぬ也。されはきるれとも、又よくよればあふ也。

【三六一段】

むかしー 業平の方へ、われをわすれ給けりと云人によみてやる也。」

(17才) 谷せはみー 谷はかり也。「せはみ」に心はなし。 み

ねまて なかくはへるかつら也。更わか思のたえんとはなきと云心也。

万歌也。ちとかはる也。業平よみあはせたるか、又つくりたるか也。古

注、これは四条后也。行平むすめ也。業平めい也。上にてはさもなくて、

下に心をかよはず也。后といひめいなれば、尤しのふ也。されとも思ひ

の切なるをいふ也。 谷せはみ 卑下の詞也。在原氏の事を云也。時

にあはぬ一門の事を云也。されとも、此後は身をもちあげたるを云也。

されとも、かつらの縁にてたえしと云也。

【三七段】

むかし男ー 色このみ 小町といへとも、当、誰ともなし。色このみ

なるゆへ、業心もとなく思也。 われならてー 下ひも 花の下ひ

もある程に、人の紐によそへてよむ也。エンセキハウ、靈風に成て帯の

とけたる古事、下ひも此説也。 ふたりしてー 必ふたりして紐をむ

すはねとも、契のさらにかはるましきと云心をよむ也。

【三八段】

むかしー 紀有常かもとへ、業の行てよそへ行たる程に、後よみてやる

也。 君によりー 紀有常よそへ行たるを待かねてよむ也。 なら

はねはー これも有常、業久しくあはて恋しく(17ウ) 思程に、われ

しも君ゆへならひたるとよむ也。

【三九段】

むかしさい院ー 淳和天皇也。大原野遺誠御骨をおさむるゆへに、西院

と申。 みこたかいこ 崇子内親王、承和十五年五月十五日薨。 男

業平也。 いてたてまつらす 逗留ある也。 源のいたる 嵯峨

源氏也。天皇の孫也。 蛭 紗の袋などに入てもつ事、好色のわざ也。

いて、いなはー 業平歌也。此段、愚見と宗祇説相違。愚見説は、

蛭の車の中に入たるをけさむは、そなたの思か見えましきと云心也。蛭

は、夏はかりもゆる也。としへたる思はなし。なくこゑもなし。これは

あさき思と云心によむ也。至をおとして読也。 いとあはれー なく

声もなしとよむ程に、そなたへはきこえずとも、我はなく也。そなたよ

り蛭をけしてありとも、我思はきえしと云也。 あめのしたー 業平、

至をほめたる也。さすか天下の色このみときくに、猶そと云也。嵯峨系

図、愚見にあり。順、サタ^{嵯峨御子}、みな名人也。御子はさた也。至は好色

の名はかりなれば、ほいなしとかく也。 宗祇説、 いて、いなはー

至か蛭をとりて入れたる也。「出ていなは」は、崇子内親王を(18才)

申也。こよひ此殿をいて給はんか限也。如煙○、又灯のきゆるを人の

命によそへて云也。不可勝計。いまたわかくてきえ給を、人々なげく声

あり。それをさきかすや、かゝる女に色めくはと諫てよむ也と云々。と

しへぬるともおもはず、わかてうせ給事也。 いとあはれー うけ

給はるまでもなく、歎をはしる也。されともきゆる物ともは、真実五諦

の火の不生不滅のことはりをしる程に、なげかすとよむ也。 あめの

したー おくは批判の詞也。好色の人なれとも、不生不滅のことはりを

云は、色このみの人に、あはず。 なをそ 直の字也。 みこのほ

いなし 崇子ー、この御ためにはなげかぬ、無本意也。「順かおほち」と

云詞、書誤也。書つけをあやまりて、中へ書入たる也。当説也。

【四〇段】

むかしわかきー げしう けすしくはあらぬ也。けしう、凶。わろくはあらぬ也。両説。 人のこ 業平。愚見説、人のこ、おやありて効カ約少の心也。祇説、可然人の子也云々。 女もいやしければ わかきと云心也。「朝廷―卿黨無如齡事」。 おひうつー よそへやらんとする也。 ちのなみた 思の切なる心也。 めていぬ よそへやりたる也。 いてゝいなはー 女の別ならず。誰かと云は、我も此世にたへしの心也。 ありしー 我ゆへによそへ行たる也。 たえ入にけり」
(18ウ) 思の切なる也。 いひし。か しのひ事は業のため、女のためを思てこそよそへやりつれ也。 ○〔補入〕むかしー 批判の詞也。 いまのおきな 業平に比ていふ也。】

【四一段】

むかしー 女はらから 業平最愛の女也。有常女也。 あてなる 業平。 いやしきおとこー これは、業の女のいもうとなるへ也。 ころさう ろの事也。六位のきぬ也。古注、平定文と云々。当、不用。 きぬを業やる也。肩花御説をはりやる事、女かゝるわさやはすへきなれとも、三従と云事あれば、さもありぬへし。 むらさきー 春の野眺望也。草花御説の萌はしめはみなむらさき色なり。 めもはるに めも遙也。春と云字をもたせたる也。いつれともわかぬ景気也。下の心は、むらさきは、女にたとへたる也。最愛の妻ゆへ、ゆかりまてかなしく思心也。 むさしのゝー 此歌注也。「むらさきの一本ゆへに」、その歌のことく、こ

の歌もよむ也。

【四二段】

むかし男ー 古注、小町。当、誰ともなし。 なをはたえー いけとも猶心もとなき也。 いてゝこしー 女のうたかはしさに、よみたる歌とみえたり。

【四三段】

むかしー かやのみこ 加陽親王、桓武第七。 かしこうめくみー つよくめくみありたる也。(19才) 人なまめきー 業平也。 又人きゝつけて 加陽御子のかゝる事を後にきゝつけて也へも。 郭公のかた 夏の比なれば、此かたを書歟。 ほとゝきすー なかなか 汝鳴也。心のあまたあると云心也。それゆへ、おもへともたのまぬと云也。

けしきをとりて 業に、加陽のかよひ給たるをかくしたる程に、やかて返事もせず、機嫌をとりて返事する也。 名のみたつー 虚名と云也。 してのたおさ 郭公一名也。「なかなかとー」よむをうけて、

それをうけたまはりて、今朝われはねを鳴とよむ也。或説、万歌に「いほりして千世もへぬへし我せこかー」、結イホリシテ夫、万に書也。夫のあまたあると云に、心あひたり。此歌をもてよむと云々。 時はさ月 そと注をかきたる也。 いほりおほきー 心おほくとも、わか方の心さしふかくはたのまむとよむ也。こゝにては、ゆるめたる也。

【四四段】

むかしー あかた め中へ也。 馬のはなむけ 送物などはなむけ也。古注、有常の中下云々。 いてゝゆくー 愚見説、もをつかはす

程に、裳をたち入てよむ也。君か行名残をしたふ程に、我もつれて都になきやうなると云々。このうたー　よまず　にこる也。業よむを

有常おもしろく思也。されとも返歌をせぬ也。はらにあちはひては、心腑にそめ(19ウ)ておもしろく思ゆへ、返事せぬ也。　いて、ゆくー

祇説、有常よそへ行てぬきつれば、装束也。「も」は、わさはひと云心也。人を祝たるゆへ、われもわさはひなく成たるとよむ也云々。万歌「たまきはるうちのかきりはたいらくーも、なくあら○をうけくつらくー」、長歌也。此「も、なく」、わさはひなく也。喪也。祇、ちかころ引出歌也。　此歌はーおもしろければ　時節の事を云也。有常きたりての事也。歌をつけてやれと、有常女、業に云也。　よまず　すむ也。はらにー　心腑にそめてよむ也。

【四五段】

むかし男ー　人のむすめ　当、誰ともなし。　この男　業平也。
ものやみ　病となりたる也。　つけたり　業につけたる也。　ま
とひきたり　いそきて業来也。　こもりー　業、われゆへなれば、籠
居○たる也。　あそひ　酒宴などにはあるましき也。　ゆくほ
たるー　或説、亡者を思てよむ也。　蜚のたかく飛を、なき人のかたへも
ゆかは也。　がり　汝と云事也。　恋ゆへ死たれば、くらき道にもまよ
ふらん。心をひるかへして、すしき道にもをもむけへはつけこせ也。
くれかたき(夏の)ー　前は一心のまよひをひるかへせと廻向也。
此(20才)歌は懐旧の歌也。時節をよむ也。此説、古注嫌たる説也。
当、余情をおもしろく見よ也。かりをよみたるは、此景気既中天秋にし

て、かりの来時分になりたる也。おくの歌は、夏の日はなかり物也。もにこもりてさひしき物かなしさを、何事となく思てよむ也。

【四六段】

むかし男ー　うるはしき友　よき友也。　麗。　おこせたるー　業平のかたへおこせたる也。みな文の詞也。　あめれと　めかるともー　文の詞に「めかるれば」とかきたる程に、返事に、めかるともおもはず、いつも人に心のそふとよむ也。

【四七段】

むかし男ー　いかでと思ふ　ねんころに思也。　おほぬさー　上句はなそらへ歌也。おほぬさは、はらへをしてあまたの手へとりわたす物也。或説、ぬさ、紙をあまたきりて手おほきはわるき也。ぬさは麻におつけたる也。大麻。　おほぬさとー　川へなかり物なれば、おもふ人にはつゐに心のとまると云は、今の女に心さしふかきよしをよむ也。

【四八段】

むかし男ー　むまのー　餞別也。　いまそしるー　人まつはくるしき物と、いま思ひしる程に、人にまたれはとふへき物へを」とよむ也。」(20ウ)

【四九段】

むかし男ー　いもうと　業平のいもうと也。　をかしけ　うつくしき也。　うらわかみー　業平、憐愍の心也。おくの段にもみえたる也。うらは、草の末の事也。ねよけは、草の末までもえ／＼としたるは、ねまでよくそあるらんと思ふ也。下の心は、うらわかみは、うつくしき也。

る。かゝる夢ちをたどる袖には、あまつ空なる露やはくらん也。よ
のつねの露にてはあらしととよむ也。後撰「空なき」とあり。(22才)
「鳴わたる雁の涙―」、これもひとしき歌也。

【五五段】

むかし男― えうましよう 我物へ思物になるましきと思ひたてたる也。

おもはずは― 我事を思はずはありもすらめと也。たえはてなから、
いひすてたることのは猶たのまるゝ哉と、我心を尺てよむ也。

【五六段】

むかし男― わか袖は― ことは書は切にて、歌はなにとなきやう也。

業平の歌にもおもしろき也。袖は常住露ながら、此さひしき時、一段観
念し出したる也。詞にていひのへかたし。

【五七段】

むかし男― 恋わひぬ― われから もにすむ虫也。五文字、一段

切なる心をこめてよむ也。つれなき人を色／＼に思ひて後、たちかへり、
人のとかはなきとよみたる歌也。

【五八段】

むかし心つき― 物語の中の誹諧也。心つきは、思に心をつくしたる也。

長岡に新都をたてたる也。此都にうつらんとてのはしめ也。伊登内親王
居給也。となりは、内親王すみ給隣也。「田からんとて」は、所のならひ、
その時節也。古注には、思の色にいてたると云心也。 いみしの― す

まをほめたる也。宮たちの御出あるほどに、業平うちにかくるゝ也。「
(22ウ) あれにけり― 宮たちの歌也。業かくる程に、あるしのな

き程にあれたると、とりなしてよむ也。からひたる歌の面白中也。古今。

この宮 いまの所也。業平の家ながら、母宮の御座所とみえたり。
宮、とかくにて見えたる也。 むくらおひて― あれたるとよみ給ゆ

へ、かくよむ也。 うれたきは 愁の心也。くる人とても鬼はかりと

よむ也。鬼はおんな也。五音相通。人をたふらかすゆへ、鬼を女とよむ
也。上句おそろしくよみたるゆへ、下句如此。「―くろ塚―」、これも女

を鬼とよむ也。 ほひろはん― まへに「田からむ」とかきたるゆ

へ、所の体を書也。みな狂言也。当流、古注相違。 うちわひて― こゝ
は女に同心してよむ也。

【五九段】

むかし男― 古注、色々の説。 すみわひぬ― さしむきたる歌也。

面白。後撰「妻木こるへき―」と入たり。俊成「住わひぬ身をかくすへ
き―」、此歌をとれり。さる程に、身をかくすへきに同心の処、又後、「妻

木こるへき」の歌をよめり。さては両様とへみえたり人々心得たり。

わかうへに― 露をおもてにそゝく也。よのつねのしつくならず、

天川のしつくかとよむ也。絶入いき出たるは、なをさりならし。其期に
かゝる歌よめる、一段の事也。

【六〇段】

むかし男― 業平、奉公也。ひまなきゆへ、真実おもはぬ人のあ(23才)

りたる也。これは小町と云説、大江これまさに供して筑紫へ行と云々。

当、不用。誰ともなし。 うさの使 一代に一度奉弊あり。業、下
也。清和天皇の御代なるへき歟。 しぞう 駅庁官人の事也。御使の

雜事する人也。その官人也。　　さ月まつ　　卯月と云説、きたなき説

也。「さ月まつ」は、たゞ橘のさく月なればよむ也。　　袖の香　　故事。

又、たゞむかしあひみし人なれば、かくよむ也。此歌より、橘にむかし
とよみ來たる由、師説也。　　―あまになりて― 業北方にてありたる

人の、かゝるものにあひくしたるを後悔して、あまに成たる也。又愚見
説、又古注にも色々あり。

【六一段】

むかし男　　うさの使の次か、又いかなる次にも行たる歟也。　　いろ

このむ　　業平を好色と云をきゝてよむ也。　　筑前そめ川　　そむると云

によりて、「色になるてふ」とよむ也。　　なにしおは　　一条殿御説

は、前歌は業好色の人に成てよむへ也。こゝは又女の身の事をよむ也。

たはれ島　　風流島と書之。此島、よそよりは浪のかゝるは、しらしき
ぬをきたるやうにみゆる也。よくくみれば、浪也。さる程に、そら事

をぬれきぬと云、此島〔23ウ〕にはすめとも、女はさもなきとよむ也。

又へ■〱祇説、好色になりかへりて業よむを、前のことくぬれきぬなれ
は、さもあるましきと、をしてよむ也。さてこそ返事なれ也。

【六二段】

むかし男年ころ　　橘よみたる女に相似たり。二段に書かへたる歟と、

一説也。　　心かしこくや　　心のはかなき也。ちとみし人(ちとみ)は、業平也。

物くはせは、拜膳の事也。　　いにしへの　　女をおとしてよまぬ也。

業の心は、さもあるまし。我身の事をよむ也。いにしへはわか所にゐた
りし人の、見すしらぬやうにもてなす程に、こけるからのやうにわか成

たと恨たる也。此女をはいはて、我身の事を云をかへりてなけきたる

也。　　これや此　　これも業平、身の事をよむ也。我にあふ事のか

れたる年月へて、みし人ともせぬを恨也。女をおとしたる説をも不捨。
一条殿御説、みなおとしたる説也。

【六三段】

むかし　　世心つけるは、人に嫁たる也。恋の心ある也。下には業平を

思也。夢かたりをして、子にあはせへ■〱さする也。古注、名虎女、紀

有常女。当、不用。　　在五中将　　馬のくち　　此時、業右馬頭、

古注。当、不用。　　男いゑに　　業平也。〔24才〕　　もゝとせに　　九

十九にてあなちあるへからす。■〱たゞ老女なるへきを、詞をかざり
てよむ也。　　つくも髪　　藻ある也。髪にかつきたるやう也。或説、百

鬼夜行をもてよめり。古老獸。付喪神ツツモカミ、百年にたらてははけぬ也。此

女、業平に見つけられたるは、はけ損たる也云々。又陰陽陽の極は九、陰陽
の極は八也。老女のきはまりと云也云々。然也。陽の数にてはあるまし

きといへとも、それまでは分かつし。八十八とはいはぬ也と云々。或説、
又如此。　　むはらからたちに　　古注「一如荆棘中」云々。当説は、

にくる程に道もなき所へ行たる為体也。　　さむしろに　　義はなくて、

しかも無限おもしろき歌也。古今、下句かはる也。　　その夜はねにけ

り　　此下の詞は、業平事を注て書也。

【六四段】

むかし男　　みへかそかに　　ひそかに也。　　いつくなりけん　　あ

り所はしりけれとも、その局をしかとしらぬあやしき也。　　吹風に

「物を」と云字に切なる心をこめたる也。 とりとめぬー 風は手にもたまらぬ也。これも古注、二条后云々。

【六五段】

むかしおほやけー 清和天皇也。 色ゆるされたる 二条ー(24ウ) 后也。三位に叙て衣キヌをゆるさるゝと、古注也。相違。その位の衣に相当せぬを、着る色ゆるされたる也。あやおり物なるへし。 おほみやす所天皇太后宮

(左傍記「長良卿ー」 染殿后、忠仁公女、清和母后也。 ありはら 業

平也。 女かたゆるされたる 一条殿御説、女中かたゆるされたる也。

祇説、好色第一とゆるしたる也。 女のある 二条后局也。 おも

ふにはー 業歌也。 あふにしかへは 身の事はさもあらはあれ也。

切なる心也。 さうし 御前よりすへりて、局にまします也。 女

おもひわひて 内裏にては、人めもいかゝなれば、長良卿里へ行也。 里

へは業猶行程に、人みなわらふ也。 つとめて 朝の事也。 との

もつかさ 女也。女孺也。長良卿里に女孺あるへき事不審。一条殿御説、

自然わたくし事にも、女孺見あひたる也。夜へ■は長良卿へ行、つと

めては朝とく内裏へまいりたる也。しのふわさなれば、香をはひとりな

け入たるを、女孺見あひたる也。此説を近來用之。 かたはに 順路

ならぬ事也。此段、ことに面白と云々。 恋せし 古注有之。当流、

恋せしの願たてたるはらへ也。三ヶ大事、一段こゝにあると云々。猶か

なしー、恋せしとわれは猶あやにくに思也。一説、恋せしとはらへすれ

は、これを限と思。不用之。 恋せしとー 此御かと 清和天皇也。

仏法にきゑんふかくまし(25才)ます也。三代実緑方緑の事。「夫子太

端嚴ー、元慶へ■三年ー。 女をはまかてさせて 染殿后をはまか

てさせ、業平を流罪也。但国史に見之由、一条殿御説。古注は、忠仁

公かゝへ給事也。くらは、座也。染殿后御局のかたはしにおき給也。し

ほるは、折檻也。 あまのかるー もをやく時、われからそのまゝゝゝ

て音をなく也。古今名歌也。子細おほき歌也。女は遠慮なき物也。二条

后、遠慮して世をほうらみしと也。 人の国よりー 前に流罪のはす

をあはする也。つくり物語の体也。古注有之。 さりとともー おく

ふかくおしこめられたるをはしらすして、只すむを憐也。 おもひお

り 二条后心也。 いたつらにー 古歌と云々。詠吟して業平かよふ

心也。 水のおの御時ー いつもの注也。清和天皇御出家之後、丹波

之みつのおに御座あるなるへし。

【六六段】

むかし男ー する所 業平領知也。 あにおと、 行平・仲平な

へるゝなるへし。 ひきゐて 将字也。 なにはつをー 前の詞を

心にしめて見よ。 けさこそー 今朝にかきらねとも、当位マヤ即妙也。

みつ 三津、水、両説也。○(補入文)海人朝暮をくるしみたるを、

下向にて観也。」業平、平城御孫にて、惟高御代になりたらは、代をはか

らひもすへきに、思外に清和御代になりて(25ウ)業平おちふれたる

を観する也。述懐也。又なきさにある舟、世にいてぬと、一説。不用。

【六七段】

昔おとこー 前段ひとつなるへきを、書わけたる也。 せうよう 遊

也。 昨日けふー 一条殿御説、昨日今日雲かはれずしてありしを、

はれたるは、花の林をうしとて晴又かくしたるか也。祇説、けふ雲のはれたるは、折しもあれ、難波あたり行つれたる時分おもしろきに、花の林のやうなる残雪をねたみ[○]、雲かかくしたる也。「狂雲妬佳月」詩の心に同前。

【六八段】

昔おとこー 前の段とひとつなるへし。 住吉郡 ニシナリノ郡也。もとは住吉郡と云歟。 雁なきてー 住吉には、あなち菊なし。世界の時分也。秋の面白事をいひのへて、春のうら／＼としたる住吉浜程おもしろきはあるまし也。「しら菊のにはへるー」、「ー住吉の里住吉の浜」、定家歌とも也。

【六九段】

むかし男ー かりの使 古注有之、更なき事也。むかしは諸国へ勅使をたて、鷹狩をさせられたる也。此時、業平、伊勢・尾張両国の使也。光孝天皇御時、愚見抄有之。もとは帝へ[■]皇自身ゆき給也。 齋宮 文徳姫宮也。「(26才) 清和兄弟也。惟高母一腹也。セイシト云々。染殿后、齋宮ノマ、母也。是を祇は用也。 そこに 齋宮の御所也。 いたつき 勞也。 われてー 二日と、古注有之、更なき事也。京より下つきてかりをして二日の夜也。われては、わりなくあはん也。又、二になりてあはん、両様也。わりなくを用。「三日月のおほろけならぬ恋しさにー」、これもわりなく也。「瀬^詞をはやみ岩にー」、これは二になりて也。此段、三ヶ大事の一也。業平は神に通たるあり。此段よりは六百年はかりの年数也。おくにも齋宮の事あり。たゝ事ならぬ也。一夜会合

のうちに嬢姪也。こゝに高階ー、いまに此氏、神のたゝりある也。さねとある 使、器量ある人也。 ねひとつ 刻を四刻にわかつ也。夜中はかりなるへし。 月おほろなる 口伝ありと云々。 うしみつ うしの時の末なるへし。二時にたらぬ也。 なにこともー 夢の

へ中へ心ちして、あふたとも思はぬと用、面白也。「あまの川あさせしら波ー」、これら面白心也。星のうへにてはたとるましきを、かやうによみなしたる、面白心也。 わか人をー 忍たるゆへ也。「(26ウ) 君やこしー 齋宮のかたよりゆき給たれとも、分別なきとよみ給也。此歌は、上二句の歌也。 かきくらすー われも分別なし。夢うつゝこよひさためよとは、又あひたきと云心也。「よひと」説あり。 かみかけたる いつきの宮よりも官になさるゝ也。 中宮なともあり。 かち人のわたれとー むかしの連歌也。あさき縁と云心也。 江 えんかけたる詞也。 ついまつ たい松也。 続松也。 又あふ坂ー 都よりくる時も坂をこえ、又かへるにも会坂をこえんとは、又必あはんの心こもる也。 齋宮ー 又注也。

【七〇段】

むかし男ー 前の段とおなしつゝき也。尾張へ行道の事也。齋宮めしつかはるゝ人にいひやる也。 みるめかるー さしむきの心也。齋宮へしるへせよ也。「わたの原八十島ー」、此歌の心にひとし。

【七一段】

むかし男ー これも、前の段をわけてかきたる也。 内の御つかひ 狩の使也。 すき事 古注、伊勢云々。梶子、人の名云々。不用。祇説・

愚見、好色の事、用之。　　ちはやふるー　人丸歌、上句同之。「いまはわか身のおしけくもなし」と有之。自然よみあはする歟。神のいかきは、物の法度也。さやうにおそろしき法度をこえても、君すめらはこゆへし」(27才)と云々。伊勢にての事なれば、面白也。　　恋しくはー　神のいさむる　やおよろつの神きはぬ道也。神は人の相統をうれしからせ給也。其心をもてよめる也。「恋せしとみたらし川ー」、此歌の心もこゝにある也。恋せしをは、神もうけられぬ也。

【七二段】

むかし男ー　前の段とひとつ也。又あはては、齋宮の事。となりの国は、尾張の事也。　　おほよとのー　大かたは恋の歌ともみえず。されとも、業平にうらみられてよむゆへは、尾張の道おほよと也。松による波のかへるは、うらみてかへる体に相似たる也。海辺によせて心をあらはし給也。名歌也。「おほよとの月にうらみてかへる浪ー」、新古にあり。これをとりてよむ也。「しほかまのうらみてかへるかり金はー」、定家もよめる也。

【七三段】

昔そこにはー　　めにはみてー　これも万歌也。作物語のならひ、伊勢か書加たる也。

【七四段】

むかしおとこー　　いはねふみー　これも万歌、拾遺にも入たり。かやうの道をへ」(27ウ)たてたりとも、心の道あらは無し細。但、此人はつれなき程に、かゝる道をへたてたるやうなと云心也。

【七五段】

むかし男ー　此段も、伊勢齋宮へよみてまいらす業平か歌也。　　ゐて　将也。そなたへまいらんと身をいさなひて行へき也。　　おほよとのー　こなたの来事はいやと也。上句は序歌也。　　心はなきぬ　みるは、あふと云事也。ねひとつ、うしみつにかたらふ心也。　　袖ぬれてー　夢はかりの契を足ぬにしてやまんとおほしめする也。上句「あまのかりほす」など苦勞の心こもる也。前にかゝりてよむ也。　　岩まよりー

返歌と前への歌、心得にくきと云也。前は一問答にて、はてゝ又みるめは色の変せぬ物也。　　しほひー　さたへまらぬ物也。定心にたにあらはと云也。世間のうらみもあるましきと云也。夢のことくあひしよりこもる心あらは也。　　涙にそー　心得にくし。世界不変の事にては、袖はぬれず。人の心のつらきゆへ、ぬるゝと云心也。　　世にー　これも注也。

【七六段】

むかし二条ー　御子に東宮をもち給みやす所と心得へし。氏神は大原野、春日の勧請の事也。藤氏后のとりわきてまいり給所也。其後、吉田勧請也。　　このへつかさ　此時、」(28才)業平近衛也。　　おきな　卑下詞云々。又此年四十也。されは翁と云々。又翁は物に長たる事也。好色に長たると云々。説々有之。古注に、長たる事の証拠。　　おほ原やー　今日御息所御参詣、いかめしき事也。神もうれしくそ思召らん也。春日は四所あり。三社月のやしろ、当氏の前へ■祖也。あめのこやねのみこと也。その契をたかへすして、東宮にならせ給てある事は、神もさ

そ、むかしの契たかへぬとうれしく思召らん也。けふこそ思召出すらん也。一心にもかやうに云心得かたし。へもとは、異于他(ママ)蜜通(ママ)の事へ也。二条後にあれへは、伊勢そこを心得てかく書たるなるへし。

【七七段】

むかし男(ママ)田むらゝ文徳天皇也。田村に陵ある也。たかきこ伊勢物語のうちに二人あり。みなかはる也。安祥寺山科にあり。

此女御事、古注にあり。此年号、末にちかひたる事あり。みわさ

後のわさ也。むかしは心さしによりて、木の枝につけていかめしき事あり。いまは、うちえた、そのしるしはかり也。ちさけおほき心也。いまそましましけると云詞也。藤行(ママ)よしゆき、よしおうの嫡男也。

めはたかひなから目将かひをつ(28ウ)くりなから、古注有之。一条殿御説、目はたかひなからと云々。山のこづくにみたる、目はたかひなから也。山のみな業へ平歌也。山か堂にうつりてあるやう也。其心は、けふの法事を感じて、こゝにうき出たるやうなる也。天安二年、多賀幾子平、年紀相違あり。不審にてはたす也。いまみれば業卑下也。注の詞也。

【七八段】

むかしたかきここれ前段ひとし。せんしのみこ人康親王、彼山科に隠遁也。もとはそれを、ぜんしと申也。よるのおまし此詞にて色くの奔走きこえたり。たはかり給色くの思案ある也。三条の清和のみゆきの事也。常行の御父のかたへの行幸也。

百花岑山の歌、業の歌しかるへき也。そのやう体也。あかねとも

常行いかに哉と思へとも、何事も満足せねとも、せめては此岩にかへて心をみせまいらす也。

【七九段】

むかしうちの在原氏の中に也。清和のみこなるへし。七夜をかさへて可然。人の産所には歌のある事也。御おほち行平の孫なれば、業平の事也。翁は卑下也。わか門に吾一門也。千ひろは、竹の事也。仙境の竹也。ハウシツ(29オ)雪のふみまよひて、一夜千丈

竹などもあり。竹は目出物にて不変の物なれば、此むまれ給人の寿命を祝てよむ也。夏冬は、竹の不変の事也。夏は暑をかくし、冬は寒をかく

す。民の憂をわすれんと云心也。それを帝王の体にたとへたり。賢人帝王に竹をはたとへたり。竹は中空虚にして、しかも直也。人の善悪をえ

らはぬは空也。君の心也。又直なる、専一也。但そのまゝにては世かおさまらす。節のあるは天下の政道也。これはさたかす此注也。

【八〇段】

むかしおとろへたか家ともなし。又業平家ともあり。雨そほふる添降はわろし。そと降也。ぬれつそ此分也。「やよひのつこもり」とありて、「春はいくか」とあるは、いかなれとも、「いくか」などよみたる、いひのへておもしろき也。懇切に藤を折てやると云心こもれり。又藤はみえねとも、詞にゆつりたる也。

【八一一段】

むかし左の河原左大臣事也。源の姓を給はる也。家を川原院(標)の事。もみちの千くさ色々にみゆる心也。此返歌にも、海に

むかし左の河原左大臣事也。源の姓を給はる也。家を川原院(標)の事。もみちの千くさ色々にみゆる心也。此返歌にも、海に

は鯨鮓をすましめ、山には虎なといへり。 さげの(29ウ)みし

「し」はやすめ詞也。 かたるゝ 佳体翁、愚見。すかた美麗の心也。

祇説、かたくなしき翁と云々。古注不用之。 たいしき 板敷なるへ

きを誤たり。いたしきと、祇直之。近來説、舞台などのやうにして、も

てありく物也。又古説、縁のいたをなかさまに敷たる也。 はひあり

きて 卑下の詞也。王位三家、古語詞也。 しほかまにいつか

こゝをさなから塩竈と思也。業の心也。されは、いつかしほ竈にきにけ

ん也。つりする舟もおもしろし。こゝにこよかし也。酒宴のあけほの、

面白歌也。 よみけるは、これよりおく、注也。「八重むくらしけれ

る」これもこゝにての事也。「君まさて」同前。「我瀟湘坐洞庭」

山谷詩に此心相似たり。

【八二段】

むかしこれたか 文徳第一御子、母名虎。 その人の名 業平、

此時当官右馬頭。むかし物かたりなれば、実名をかゝて、かやうに書た

る、一条殿説。祇説、業平は平城天皇孫にてたとき人なるか、官位のあ

さをたすけて、如此書たと云々。 なきさ、そこにある院の事。」

(30才) かみ、御ともの上中下人也。 世の中に、つよく花

に食着の歌也。花ゆへさま、心をつくす也。所詮なかりせは也。さ

ればとて、桜をいやとてはなし。たへで、一説。当には不用。一説、

花みる程はその事なれば、■花なくは日月のとかならんかと云々。

最初の説を用。 又人の歌 紀有常歌也。 ちればこそ、引かく

したる歌也。 めてたけれ めつると云心也。世界は不定を愛する也。

桜は見事なれば、ちると云事なくは感ふかゝらしと云々。下句に觀念あ

り。「残なくちるそめてたき」、此歌にひとし。又此歌は、前の返歌と

みえたり。業平愛着の心をいさめたる心也。当座の儀ははかりかたし。

後によみたるかはしらす。 さげ、古注、不分明説。 おほみき

御みき也。業しやくをして酒を惟高にまいらする時の事也。 かり

くらし、別の義なし。 七夕つめ 妻也。時節は春の事也。其時に

かゝはらすして、当座の体はかりをよみたる、面白也。 すし すん

しとよむ。吟也。 返しえし、不審の(30ウ)事也。吟のあまり

か。又帝親王は、直に口つからはあそはさぬ、有常によませらるゝと。

不用。「白雲のたえすたなひくみねにたに」、「桜花ちらはちらなん」、

いづれも名歌也。惟高。 一とせに、七夕・ひこほし、両方の契也。

そのこんまては、宿かすましきと云心也。 君まては 待也。これは

面白心はおなしけれども、後説よからんと也。 十一日 弥生十一日

なるへし。古注説、惟高を月にたとへたる也。清和におもはず位をとら

れて、光のみちぬと云心、不用。 あかなくに、義なし。御子に名

残をおしみてよみたる也。 山のはにけて 誹諧也。当座の歌にはめ

つらし。細にはよむへからず。 をしなへて、義なし。これも古注

あり。さしむきてみる、よし。

【八三段】

むかし、これも前段とおなしやう也。 とくいなん、古注、小町

を業相具たり。不用。久敷御ともしてありくゆへ、かへらんと思を用。

心もとなかりて、古注、小町心おほきゆへ、留守を心もとなかる

也。まくらとてー 義なし。古注、小町を心もとなかりて、なかき

契とたのまれぬとよみたり。不用。前はかへりたりかたれとも、酒宴な
とになくさめて、御子に同心申て、春の夜はみしかき也。秋のなかきた
におしむに、一宵一刻と同心の^{事也}。時はやよひのー 注也。三体詩

「三月正当三十日ー」、こゝにあひたり。」(31才) おもひのほか
惟高の事也。貞観十四年七月出家、御年廿六。 おかみ 拜也。 し

候せはや也。 わずれてはー 無是非歌也。此段あはれに面白。うつゝ
なれとも、これは夢かと思ふ。此御為体を見まいらせてよむ也。

【八四段】

むかし男ー 身はいやしなから 業平卑下也。 はゝなんー かや

うにかけは、「いやしなから」とかくも尤也。 宮つかへ 業平事也。

清和時分。 しはく しけく也。 とみ いそぎの事也。 お

いぬれはー 義なし。 さらぬ 不辭也。 世中にー やうもな

し。一説、業平我事にてはなし。世間の事をよみたり。不辭別。 な

くもかな 人々おやの別をおしむ也。「ー不及於一切ー」、此廻向など

におなし。

【八五段】

むかしおとこー 大かた前段とおなし。但あくる年のやうなり。「む月に

はかならずまいりけり」とあれは、前にはやまいりたりとみえたり。

宮つかへ 業平。 そくなるせんし 僧俗の事也。 事たつ た

つはそへ字也。ことは異也。ことに也。一条殿御説。祇説、祝言の事也。

たつはそへ字、ことふきと云下略也。 おもへともー 業平歌也。お

もへともは、此御子に不断奉公」(31ウ)も申たき也。但身をふたつに
わけねは也。我は帝につかへ申程に、心にまかせぬ也。めかれせぬは、
雪の事也。奉公申へ[■]たさは、此雪のこどく年々歳々つもとよみ

たる也。一条殿御説。「君かおもひー」、此歌などをひかれたり。作例。
祇説、下句ちと相違。都へかへらんとすれば、雪つよく降也。もし我心

【八六段】

むかしー わかき男 業平。 女 誰ともなし。業も母ある事也。

心さしはたさん 両方猶執心の事也。 いまゝてにー 義なし。

程をへたる也。 おのかー はるかに年をへたる也。此内にてわれは

わずれぬと云心のこもるか見所也。 あひはなれぬ 染殿后にまいり

たる事か。有常女、後に宮つかへし^{たり}。いつれとはかりかたし。

【八七段】

むかしー あしやの里 業知行也。 あしのやのー 新古には、業

と入たり。こゝはさも見えす。爰は古歌と見よ也。万歌「ーめかりしほ

くみー」、いやしき人のなり也。むかしは男女ともに櫛をさすか礼^{マツ}義也。

あまなどは、さやうの事もなき也。此歌をは、此所とかきたる証拠に書

たる也。そのむかしこゝを、今の事也。善字、古注。 なま宮つか

へ 又美字、古注。漢書を引よしとあり。不用、愚見・祇説。さしたる

宮つかへ」(32才)にてはなし。 ゑふ へ[■]六衛府の事。此処

の海辺、眺望みんとて皆来たる人也。 このかみ 行平也。兵衛督な

るへし。いさこの山のー海辺眺望おもしろきゆへ、行／＼て山のかみの滝をみると、「いさ」とさそふ心、面白。海辺おもしろさもふかくなる也。そのたきもの 天台山の滝大なり。それに比たりと云々。不用。ものよりことなりとは、すぬけて面白と云を用。源にもお花の事をいへり。しらぎぬ かのゑふのかみ 行平、先よむ也。わ

か世をはー官いやしくて、世間をうらむる心あり。けふかあすかと命の事みるは、きふくてわろし。今日明日とさすらひありく也。まつかひ まつ間也。まつがひ、一説。間といふゆへに、かみにあると云々。これも無子細。涙と滝とを比也。不似合か歌道也。「枕の下にあま

そつりする」など云ことく也。思の切なるもきこえ、滝の妙なるも見えたり。あるし 業平事也。ぬきみたるー前は述懐、これは眺望也。滝の奇特をよみたる也。上に玉のをゝときて、はらりとみしたるやう也。誰か如此するそ也。袖のせはきは、卑下也。かゝる袖にはちらしと思ふに、誰かかくするそ也。事外滝をほめたり。」(32ウ) わらふ 入興の心也。やみにけり 帰たる也。道とをくて あし

や・布引の間、三里はかり也。宮内卿ー系図みえず。古注には、三善氏とあり。不分明事也。こゝにて「うせにし」など(註)書たる物語の余(標)□情あはれふかくて面白也。いさりする火ー眺望の体也。

はるゝ夜のーよくきこえたり。但あまのいざりと見てありなから、「はるゝ夜の」とよみて、星の数おほきを火にもたせて色々にうたかひてよむか、誠に歌道也。女かた 業の女中也。たかつき 土器也。いまはたくみにすると云々。わだづうみのー竜神のかさ

しと云也。いはふは翫心也。されとも、こよひ南風ふきてみるなどをよせたるは、下向の人たちのため也。おしまさりけりといふにて、惜心はきこえたり。ゐ中人ー批判の詞也。よく／＼みれば、ちとはさしすきたりと見えたり。

【八八段】

むかしいとーそれか中に 業平也。おほかたは 義なし。物に

貪着のはかなき也。月をたにめてしと云いはんや、さらぬ事に着て、いたつらに月日をはをくらしと観念すへき也。」(33才)

【八九段】

むかしいやしー業平也。色々にかきたる也。「いやしなから」などもかけり。まさりたる人 誰ともなし。可然人也。当説。古注は二条后云々。人しれすわか恋ーいつれの神 古注には、我恋しなは人の病になりてくるしません程に、いつれの神のたゝりそと人の思はんと

云也。当流、人しれぬ恋ゆへむなしく成たらは、いつれの神のたゝりにて死たるそと、人におもはれん也。

【九〇段】

むかしー事かきにてあらは也。さくら花ー花のあたるに人を

たとへて尺也。と云ー此歌、さして何事もきこえぬ也。注詞也。

【九一段】

むかしー月日のゆく 人のつれなくて、月日をなげく也。春くれば、秋暮かきりあれば、思ひなともことに切也。おしめともー義なし。人にあはてと思ふ心の切なる也。夕暮□さへとは、つよくかなしき也。

此「哉」も観念ふかき也。

【九二段】

むかしー 音つれをたにえせぬ也。 あしへこくー 業へ平^{*}。 た
なゝし小舟 ちいさき柵なき舟也。あしまを行も、小舟は人のしらぬ也。
その体を我恋によそ^二33ウ^一へてよめり。「ほり江こくたなゝし小舟ー」、
おなしやうなる歌也。

【九三段】

むかしー になき 一段上臈也。たのみぬへきさまに成て、猶切に思
也。 あふな^一ー 定家説、あぶと声をさしたり。不審。一説、か
なし^一と云心也。悲也。あふなきに通也。費長房説、「天仙ー 悲^{アツナク}」。

素戔尊御歌と云々。「わきもこかこぬ夕暮はあふな^一真木の板戸も
さゝすこそぬれ^一、それも悲々と書たり。いつれも他説。あふな^一は、
懇也。「お」と書は五音兩通。一条殿・祇説ひとし。心は懇に思はすへし
とは心得られぬ也。されとも、我思かつよく切なる也。 なそへなく
なすらへなく也。詞書にあはぬ恋なれとも、尊卑によらす恋は切也。

思召しれ也。 なそへなく 平等に也。 すへし 心得られす。愚

見説、おもふへし也。そなたより思召候へと云也。定家奥書、「郭公
こよ鳴わたれ

ー」万歌、此ために書給也。此「なそへ」の証歌に書也。堯孝説
とてかなし^一を用云々。かなし^一、おもふへしと心得たる也。片岡、
近江説。」(34才)

【九四段】

むかしー すますなり 夫婦のかたらひはなれたる事也。すむは、夫

婦かたらふ事。源にもあり。 子あるー 業、子ある也。 ゑかく

業かあつらへたる也。 ことほりとはー 此詞面白。業か恨也。

ろうして 哂也。嘲哂心也。愚見説。祇説、漏也。もらしたる也。此
恨をつゝますしてかきてやる心也。嘲哂の心は、いまの男の事をいかめ
しくよみたる也。 秋の夜はー 秋をいまの男にたとへ、春日は当季
ならぬを業の身にたとへたり。いまの男をおもふは、千重をましつらん
也。 ちゝの秋ー 末か心得にくき也。ちへまさらんとよむゆへ、ちゝ
の秋、いまの男いくたりにも、業ひとつにはへ^むかはん物かとよむ也。

かやうにはいへと^も、いまの男とても業とてもたのまぬと云心に、紅葉
花を比して、観念の歌也。

【九五段】

むかしー 業也。 女つかうまつる これも二条後の女房達也。 思
ひつめたる 思ひあつめたる事也。忠仁公家礼、染殿後に別而奉公ゆへ、
二条后にもまさる也。 ひこほしにー 年中に一たひあへとも、へた
てはなき也。 へたつる関 物こしにあふを、かひなく思也。」(34ウ)

【九六段】

むかしー 古説、身にかさ、男の事也云々。業にならへて、くとく人一
二人ありと云々。「つくりをくやまとしまねのむかしよりー」歌を引。加
左男云々。 秋風吹なん 物こふ人をやめてあはんの心也云々。陰陽
紀^一、引。愚見説・祇説、ひとし。さしむきたる義理也。 くせち 世
間の人の物いひ也。しのひ事あらはれたり。業かたへゆかんの心つかひ
を^二する也。古注、二条后と云々。 かきつけておこせたり いぬる時

かきたるを、後におこせたる也。 秋かけてー 尋常なる歌也。秋かけては、秋になりて也。

このは はつもみちをひろはせて書ゆへによむ也。 江に 木葉ちりしくは、あさくなるえんによそへて、あさき縁とよむ也。 けふまでしらす 知へきなれとも、物語なればかく也。 人のゝろひ事 業心中也。 さかて 愚見説、日本紀を引給

のろふ事、或説、人をのろふとて月日の文字をさかさまに手にかきて、棟にあかりて、手をたゝきてのろふ事也。当流、あまか浪に入とては、手にて浪をうちてさかさまに入也。つよくくるしみたる体也。おほいきをつきたる体也。 むくつけし おそろしき也。むくくしきと云心。
ムクツケシ 蠢也。一(35才)

【九七段】

むかしー 昭宣公、染殿后兄弟也。 九条にも御所あり。 中将 業平也。 四十賀 貞観一、中将にてはあるましけれども、極官ゆへ後に如此かく也。 さくら花ーちりかひくもれ 散てかきくもれ也。 老らくは、四十より老来也。その道をまかへよ也。 かに 「か」はかり也。「に」は助也。がにと云。されとも詞ふつゝかにきこゆる也。それをは心にもたせて見よ也。

【九八段】

むかしー 忠仁公事也。つかまつる男は、業平也。家礼ゆへかく書也。 雉をつけたるは、鳥柴の心也。 わかたのむー 祝の歌也。 忠仁公事也。ときしもは、ときはなる心也。 つくり花なれとも、まことの花のやうによみたる也。 君かたにおれは、ときはなると也。「きし」をたち入

たり。「千年までかきれる松もー」、かやうのたくひ也。

【九九段】

むかしー 右近馬場 口伝ありと云々。大かたは、一条大宮也。 東を右近、西を左近と云々。ひおりは五月五日六日にあり。競馬又騎射あり。 荒手番真手番と云事あり。前稽古の日を荒手。荒手三日、真手四日あり。 前一日つゝおきて稽古也。ひおりの日とは、五日六日当日を云也。 騎射にのる時、装束(35ウ)の袖をひきおりにけるゆへ也。 見すもあらずー ほのかに見たる心也。 あやなく 無益、一説。此心にあはぬもあり。「春の夜のやみー」、此歌に此歌ひとし。かひなくと云心也。 あちきなし、同事也。 しるしらぬー しりもせよ、しらてもあれ也。 おほつかなくよみたる歌の返答なれは也。おもひか切ならば、則しるへなるへきとそこへ■■■■領掌の歌也。 大和物語、返歌相違。

【一〇〇段】

むかしー はさま 清涼・後涼のはさま也。源などにも、ほそ殿と云々。 後涼には后たちおはします也。此人、大概二条后也。業のかれく成て、忘るへき比なれば、かくし給也。 わすれ草ー 「草おふる野へ」とつゝけたり。これはしのふなれば、後にも心のかれましきと云心也。 しのふ、わすれ、此歌は一名を二に云と云々。忘草の事、くわん草、しおん、又軒におふる一葉のやうなるを忘と云々。したに似たるをつねに用。

【一〇一段】

むかしー うへにありける 行平も良近も同次第事。良近うへにある

と云事、愚見相違事。たゞ殿中に祇候の良近」(36才)なるへしと、祇説。さね 其人を本にしたる也。あやしき 奇也。たくひなき也。花のしなひ しなひは、品の心也。ふさの長也。あるしし給 さつしやうの事也。しらすり 卑下也。さく花のー 今日座敷の体をよむ也。藤の大なる下にての酒宴也。つねにみぬ藤のふさなかさなれば、かくよむ也。なとかくしもー ことほりのきこえぬと云心也。おとゝー 藤氏良近もさる事なれとも、清和の御代、此おとゝの事をよむとて、ことに感也。

【一〇二段】

むかしー 業事。これも卑下詞也。世中をー 此詞おもしろし。歌よむ人の面目也。あてなる 勝字。よき女也。伊勢齋宮のほり給て、出家の処へ、業よみてまいらする也。しそく 親族、親類を云。かやうに書、不審なれとも、一夜の契ゆへ、御子の出来たる程に、よそならぬと也。そむくとてー そむくとて、雲などにのる奇特はなけれども、齋宮のそむき給をうらやみ申也。前の詞に「思ひしりて」とある、よくあひたる也。齋宮 注詞也。

【一〇三段】

むかしー まめも実、同事。真実の二也。ふかくさの御門」(36ウ) 仁明天皇の事也。仁明・文徳・清和・陽成に業はつかへ申。心あやまり 作物語ゆへ、実と前に書たる程に、あやまりと書也。ねぬる夜のー やうもなし。業平の歌の中の名歌也。打吟に哀ふかし。遇不逢恋の心也。かりそめに逢たるは夢也。其後は、又みしに似たる夢をもみ

ぬと云也。さる歌のー 卑下の詞也。

【一〇四段】

むかしー 両段におなし。齋宮の事。ことなる事 天然道心也。おとこ 業也。世をうみー 海人にたとへたり。尼に成たるをかけり。めくはせ 心をかよはして目をみあはする心也。めによそへてよむ也。ちと狂歌也。

【一〇五段】

むかし男ー これも義なし。業の方より、思切なりといひやりたる返事也。白露はー よしきゆるとも、こなたよりは是非すまじきといふ也。玉にぬくは、露を愛する事也。なめし 無礼也。愚見説。

【一〇六段】

むかし男ー これも義なし。さしむき也。みこたちは、其時親王成へし。立田川とはかりみれば、郡はせはし。あなたこなたへ」(37才) 逍遙しありきて、此歌を竜田川にてよみたる也。千はやふるー 神世もきかすは、神世程奇異なる事はなき也。されと此景のすぐれたる事は、神世もきかぬと感たる也。はかりなき興なるへし。業歌にとりても上作也。心たらすといへと、心詞かけあひたるにて、定家も心感たる也。「住吉の松を秋風」なども殊なる事なくして、しかも奇特也。此たくひ也。

【一〇七段】

むかしあてなるー 業事。もとなりける人 業いもうと也。おさ／＼しからず 長也。古今長歌詞、同之。いまたおさなき也。歌はよまさり 業のいもうと、若草の返しもあれば、よまぬにてはあるま

しき也。こゝにては物語のならひ、かく作也。 つれ／＼のーなかめ

雨のかたを、ちともちてよみたる也。詠のかた本也。 あさみこそー

「袖のみひちて」と云に、問答の歌也。それはあさみと云也。 い

まゝてー 前の〈詞〉也。此下の詞不審也。二段なるへきを筆者あやま

りかと、堯孝なども申。「なむいふ■」なる「まてにてはてたると云々。

されとも詞は不審、義は相違」(37ウ)なし。えてのちは、はつ草の女

をわか物にして後の事と心得へし。 あめはふらし 雨ゆへまいらぬ

と也。 数／＼にー 業かはりてよむ也。数々はさま／＼也。おもひ

おもはずも、さま／＼の心也。一条殿御説、ちと相違。 身をしる 涙

と、或説あり。一向不用。一条殿・祇説、同心。上句は詞のことく也。

此雨はふらしといへと、猶降程にかこつけ也。とはすは、おもはぬ成へ

しと、一条殿御説。祇説、おほしめす、おほしめさぬはしらす、とひか

たく、はや成たる也。雨程の物にさへられては、なさけすくなしと云々。

みのも笠も 作物語なれば、かく書也。 しと、 つよくぬれた

る也。身にしと／＼とつく程なるといへと、それ程までは如何候。

【一〇八段】

むかし女ー 風ふけはとばにー(「は」に左傍記「ノ、声此分」) つねに

也。常。わか袖のかはかぬを、水辺によせたる也。 なれや つよく

歎心こもれり。 き、おひて 業我事をき、おひたる也。 夜るこ

とにー わかとかにてはなし、そなたの袖のぬるゝは也。よひは、蛙夜

鳴ゆへ也。恋も夕暮より夜つよくおもはるゝ也。田は、「かはつ」いはん

ため也。蛙一鳴はあまた鳴也。〈御〉心かおほくあるとおちつく也。かは

つかしきりて鳴は、雨ふらねと水のまさることくおもふ也。」(38オ)水

こそまされは、人の袖也。こなたの所意にてはなしと云々。一条殿御説、

同之。或説、我思ひするによりて、そなたの袖かぬるゝとよむ也。前の

歌、つよく恨たる歌なれば也。此義理の時は、男のおほきにてはなし。

かはつにもよほされて、水のまさる心也。順雨記といふ物に、水は蛙の

気によつてますとあり。

【一〇九段】

むかしおとこー 別の義なし。 花よりもー 歌もさしむぎへて也。

花程はかな物はなし。それよりも、人かはかなく成たる也。「いつれをさ

きに」と云より、人の心をくみしりたる作意あり。「うへし時花まちとを

にー」、此歌に心かよひたる也。

【一一〇段】

昔おとこー 業のしのひかよひの女也。 思ひあまりー さしむぎ也。

人のかたより夢に見たと云をはたらかさす、同心したるか好色の名譽

也。 たまむすひ ましなひ也。「玉はみつぬしは誰ともー」。そなた

に我玉しゐはとゝめたくと也。とゝめよと云心也。」(38ウ)

【一一一段】

むかし男ー 一段の上臈なるへし。 いにしへはー 此歌、なくなり

たる人をよむと云、○説。たゝ一段上臈なれば、いまたみぬ人を縁をも

とめてまいらす也。 いにしへはー 別の義なし。またみぬ人を、

いにしへはこふる事もありけんや。われはいまそしる也。 下ひものー

人にこひらるゝ人は、下帯とくると云也。 かたることは 言か

ことくはと云心也。恋しとは一 きこえたり。是非の御返事大事なるを同心して、必帯か御とけあるへしとよむ所、面白也。後撰にては、此歌先やりて、下ひもの歌あり。詞ちと相違。

【一一二段】

むかし男一 すまのあまのー これも義なし。序歌也。 おもはぬかたにー へ■ゝいはんためはかり也。

【一一三段】

むかし男一 なかゝらぬー これも義なし。長短の字入たらは優ならしを、つゝけからおもしろし。

【一一四段】

むかし仁和ー 此段は、業平没後四五年以後の事也。不審。」(39才)或本には不載云々。芹川行幸、はるか後也。伊勢か書入たる段、勿論也。滋春、業子也。好色を相続したる也。滋春か書たる事。はしは鷹かりとそと□よむ事、一条殿棄破也。仁和 光孝の事也。 たかかひへ■

■ゝ 行平也。

にけなく につかぬ也。 もとつきにける むかしより鷹飼なるゆへ也。 すりかりきぬ 鷹場の時、必此装束を着。

後撰詞書、「鶴」とあり。 おきなさひー 翁のされすさひたる体也。

行平、年よりてにあはぬと也。 一条殿。衰^{サヒ}。 「一色忽衰^{サヒタリ}」、おとろ

へたる翁と云心、「漢高祖^{漢書}兩眼衰^{サヒ}」神宿(神宿)に左傍記「カミサヒ」。

翁はかりと此心にては用也。「たつもなくなる」は、鶴ぬひたるゆへよみ

たる也。今日は宿老なれば出たり。此後は上表と云也。されともきゝわ

ろきゆへ、御氣しきわろき也。仁和五十七の御年也。さるゆへ、御門の

御うへと思召て、無祝歌也。行平は六十九、明年四月致仕表を奉る也。「さかの山ー」、嵯峨御時、これも行平歌也。」(39ウ)

【一一五段】

むかしみちの国ー 業平なかされての事也。おきのる・宮こ島、一所也。東国名所也。 おきのるてー 五へ■ゝ文字、名所へ■ゝかくしてよ

む也。「おきの火をわか身におきてやくよりも」とよむ也。古今は物名に入。小町歌。一をはかくし、一をあらはによむ、不審。宮こへ行人の別、島にとゝまる人も○なしと、二にとりわけてみれば、かくし題に相

当して面白也。或説也。

【一一六段】

むかし男ー 浪よりみゆるー 別義なし。序歌也。ひさしくといはんため也。 はまひさし 浜のすなを吹あつめたる体也。これを用。と

まなどを引かけ、ひさしなとかりそめにしたるをも用。 あひみで 熊野行幸時、定家「霜をかぬ南の海の浜ひさし久しくのこる秋の白菊」、庭上秋菊と云題也。これより居所に用也。 なに事もー いまは思事

なしと云心なるへし。御心やすくおほしめせ也。文の詞也。「馬上相逢無

試筆ー」、此心もかよひたり。

【一一七段】

むかしみかどー いつれの御門ともみえず。注には、陽成云々。国史にみえず。 われみてもー 義なし。」(40才) むほむがみー

けきやう 顕形也。此歌を、袖中などには御門の御歌とあり。 住

吉 神后皇宮うつし奉り給たる也。祇説、此歌は業平也。 むつまし

と一 義なし。住吉明神御門の和答とみれば、よくあひたり。業平は「住吉の岸の姫松人ならば一」、後に、住吉へ参てよみたと云々。「衣たに二ありせはあかはたの山に一は一」、これあらはれ給て御返事なりと云々。

【一一八段】

むかしおとこ一 玉かつら一 別の義なし。心のおほきと云体也。

【一一九段】

むかし女一 かたみこそ今はあだ一 もとはあ。たと誑也。あだ、優成へし。定家卿「かたみこそあたのおほ野一」、此歌をとれり。されは、定家時もさたありしとみえたり。あだは、為氏時代よりの事也。

【一二〇段】

むかしおとこ一 世をへぬは、人々最愛なきと云心也。 あふみなる一 義なし。業平歌也。下句にて、人をいひおとす心見えたり。しる人こそひとりなれ、猶あるへしといふ(40ウ)心あり。

【一二一段】

むかしおとこ一 うくひすの一 雨のふるに梅壺より出るゆへ、かくよむ也。催馬楽「あを柳をかた糸によりて一」。 鶯の花を一 返し源至と云、不用。誰ともなし。鶯の笠はいやと也。業の心さしをつけよ也。ぬるゝゆへ、ほしてかへさんと云也。 おもひ 火のかたへよむ也。それゆへ「ほして」とよむ也。後撰に「雨ふれとふらねとぬるゝ袂哉一」、これも、おもひにかはらぬ火を以てよみたり。「たよりにもあらぬおもひのあやしきは一」、これを火と云。これは火にてはなし。火とみれば下劣也。

【一二二段】

むかし男一 山しろの一 一条殿御説、「手にむすひ」、互契也。祇説、橘諸兄本説を以てよむ。ある井を堀て、死へ■後影みゆへきと云々。其後、妻みればさもなし。はかなき事をよむ也。此説、未勘。井〇ての下帯の事をもて見へし。

【一二三段】

むかし男一 深草 古注、二条后事。清和崩御後おはしますと云々。年紀相違。 年をへて一 義なし。あはれふかき歌也。女を顧心か業情也。(41才) 野とならば一 われはこゝをかれしと云也。 かりにたに 狩と申説、不用。かりそめの事也。よもかりそめにとはてははてしと云也。身を知心ふかし。

【一二四段】

むかし男一 分別しかたし。 思ふ事一 古注、大事ありと云々。中道観など云。当、不用。此歌に義をつけぬか当流也。

【一二五段】

むかし男一 つゐに行一 五十六没期の事也。毎日三条后御とふらひあり。ある時、「つれくの一」、此歌をよみてと、たゝの時給、その御返事と云々。不用。昨日は今日とはおもはぬと云説あり。それは不優。たゝさしむきてみる也。辞世歌也。人々のうへ哀なる歌也。

右四十一枚也 本六十五枚
半切也 「(41ウ)

伊勢物語全篇講尺聽聞之次染筆。漏泄不可勝計、呵々。追而可清書者也。

永正二年十月六日

平朝臣孝盛

みるめなき我身をー或説、小町卑下の歌也。みるめなきは、我にみところなしと云々。それをしらて、あしたゆきまてくるといへる心也。うらは、たゝみるめといふに、縁の詞ならし。」(42才)

右這聽書者、前内府実隆公講尺、杉原伊賀守平朝臣孝盛所注置也。

説々只
○ 応隨所好乎。

永正十七年六月十二日書写訖」(42ウ)

【付記】

本稿は科学研究費(15K16695)ならびに基幹研究「鉄心斎文庫伊勢物語資料の基礎的研究」による研究成果の一部である。

